

鈴木 はい。えっと、まずですね、えっと、野瀬時貞さんでいいんですよね、お名前は。

野瀬 はい。

鈴木 はい。で、えっと、何年のお生まれになりますか？ 野瀬さんは。

野瀬 1996年。

鈴木 96年。

野瀬 ええ。

鈴木 の、何月何日生まれですか。

野瀬 11月13日。

鈴木 じゃあ、今年で何歳なんですかね。

野瀬 今年25歳です。

鈴木 25歳。で、お生まれはどちらになるんですか、京都の。

野瀬 桂です。

鈴木 ん？

野瀬 桂。

鈴木 桂ですか。

野瀬 ええ。

鈴木 ご兄弟はいらっしゃいますか。

野瀬 はい。僕、合わせて5人兄弟。

鈴木 あ、5人兄弟。野瀬さんは何番目なんですか。

野瀬 下から2番目。

鈴木 あ、下から2番目。で、えっと、野瀬さんの、あの、診断名って、正確に言うと何になるんですか。

野瀬 脳性まひと。

鈴木 はい。

野瀬 先天性脊髄損傷。

鈴木 先天性。筋ジストロフィーということでは・・・。

野瀬 ではない。

鈴木 ……ないってということですね。

野瀬 ええ。

鈴木 えっと、この、えっと、先天性脊髄損傷にしても脳性まひにしても、診断ってどちらの病院でされたんですか。

野瀬 脳性まひは、僕の物心がつく前なんで・・・。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 ……はっきりとは分かんないけど、恐らくヨゼフ。

鈴木 ヨゼフ。

野瀬 園。

鈴木 ヨゼフ病院。

野瀬 聖ヨゼフ学園やったかな。

鈴木 ああ。それはどういう病院？ えっと、病院なんですか。

野瀬 恐らく病院。

鈴木 あ、病院ですか。で、先天性脊髄損傷・・・。

野瀬 損傷は、小学校6年のときに宇多野病院で。

鈴木 ああ。じゃあ、その部署、宇多野病院のどの部署で、えっと、その先天性脊髄損傷ってご診断を受けたんですか。

野瀬 診断をくださったのは、整形外科の先生なんですけど。

鈴木 あ、整形外科。

野瀬 発見しはったのは、ちょうど小児科の研修医の先生が、「もしかして脳性まひじゃなくて、別の病気、障害があるんじゃないですか」って言って、精密検査とかしたら見つかった感じですよ。

鈴木 あ、宇多野病院の小児科の先生が。

野瀬 そうですね。

鈴木 その、あの、もしかしたら別の障害があるかもしれないと。そしたら精密検査で、

えっと、すぐ診断っていうか、分かったんですか。

野瀬 まあ、MRI とか撮ったりしてね。

鈴木 何を。あ、MRI。検査するとき、なんか、あの、痛みを伴うものとかってありました？　なんか。その先天性脊髄損傷の。

野瀬 小学校のときなんで、あんま覚えてないんだけど……。

鈴木 あ、覚えてない。

野瀬 なんか電流を軽く流すような検査だって。なんか、それを首に、首とかにやったら痛かったのは覚えてます。

鈴木 あ、痛かった。この、えっと、ご病気というのは、大体そうやって首に、なんか電流を流して診断するんですか。

野瀬 まあ、僕、あんまよくは分かってないんだけど。

鈴木 ああ。じゃあ、なんか組織をこう、例えば筋ジスの場合だと組織をこう、採ったりとかするって聞いたことあるんですけど、そういうことはなかったってことですか。

野瀬 は、なかったです。

鈴木 あ、そういうのはない。で、あの一、あの一、何ていうんですかね、その、どういう経緯で宇多野病院に入院、あの、入院っていうか、小 6 のとき、あ、ごめんなさい、小、小……。

野瀬 6 のとき、まあ、それは。

鈴木 あ、6 歳のときでしたっけ。

野瀬 入院は 6 歳です。

鈴木 そうですね。どういう経緯で入院することになったんでしょうか。

野瀬 生まれつき体がやっぱ弱いっていうのがあって。

鈴木 はい。

野瀬 親の学校への送り迎えとかが毎日は厳しいとか、体調不良になったときもすぐに診てもらえる環境がいいっていう親の、多分、意向もあって、まあ、当時、隣接、支援学校と宇多野病院が隣接してたんで……。

鈴木 はい。

野瀬 で、まあ、宇多野に入ったら、先生が迎えに来てくれて学校には通えるから、そこがいいんじゃないかってなって……。

鈴木 ああ、なるほど、なるほど。

野瀬 ……宇多野に入院した形です。

鈴木 ああ、なるほどね。あの一、入院された部署っていうのは、筋ジス病棟ではないってことなんですか。

野瀬 いや、筋ジス病棟です。

鈴木 筋ジス病棟。

野瀬 筋ジス病棟と小児科病棟が一緒なんで。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。あの一、えっと、入院されるまでに、宇多野病院に何度か通われたりとかしたんですか。

野瀬 いや、体験入院みたいな形で何度かは行ってた……。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 ……ていう話は聞いたことあるんですけど。

鈴木 ああ、はあはあはあ。

野瀬 小さい記憶なので、あんまりはっきりは。

鈴木 ああ、はあはあはあ。体験入院というのは、何日間かとか。

野瀬 多分、2泊3日とか……。

鈴木 2泊3日。

野瀬 ……1週間とか、そんな程度やったかな。

鈴木 ああ、はあはあはあ。検査のために1カ月に1回通ったとか、そういうことってありましたか？

野瀬 は、ないです。

鈴木 あ、それはない。

野瀬 学校に通う目的で入院しだったので。

鈴木 ああ、なるほど、なるほど。ということは、じゃあ、6歳よりも何歳か前からも、学校に入るっていうことをちょっと考えて、宇多野病院に。

野瀬 何個か支援学校の見学とかは、多分、行ってたんですけど。

鈴木 なるほど、なるほど。じゃあ、幾つか、じゃあ、選択肢はあったってことなんです

ね。

野瀬 そうです。

鈴木 ふんふんふん。

野瀬 でも、病院と隣接してるのが、そこの鳴滝っていう学校で、鳴滝総合支援学校に行ってたんですけど。

鈴木 ああ。じゃあ、基本的に病院と隣接してるのは鳴滝だけだった。

野瀬 恐らく。

鈴木 はあはあはあ。

野瀬 当時は。

鈴木 なるほど。その通うときって、どなたが送ったりとかされてたんですか。

野瀬 あ、もう、全部、先生が送り迎えを。

鈴木 あ、あの、ごめんなさい、あの一、入院される前。

野瀬 あ、は、親が。

鈴木 親。どちらですか、母親と父親と。

野瀬 小学校の前とか小学校最初のほうは、お母さんがほとんど。

鈴木 ふーん。その体験入院されるときも、お母さまが。

野瀬 多分そうです。

鈴木 ああ、はあはあ。お仕事って、あの、お母さまは何かされてましたか。そのときって。

野瀬 そのときは配線関係かな。

鈴木 配線関係。お母さんは何か、あ、お父さんは何か。どんなお仕事……。

野瀬 お父さんは道路公団。

鈴木 道路公団。てことは、日中はじゃあ、お父さんは基本的にもうお仕事に行かれてって。

野瀬 そう。2人とも。

鈴木 あ、2人ともですか。

野瀬 多分。

鈴木 はあはあはあ。

野瀬 お父さんに関しては、もう土日も関係なくなの。

鈴木 ああ、じゃあお忙しくて。じゃあ比較的、あの一、その病院の関係で対応できたのは、お母さまのほうが時間的に・・・。

野瀬 そうです。

鈴木 お父さまはあれですか。なんか、あの一、例えば、その、検査入院するときとか、どうしよっかみたいなの、こう、話したり決めたりすることにお父さんは結構、関わっていらっしたんですか。

野瀬 いや、全部お母さんが。

鈴木 あ、お母さんが。じゃあ一応、お父さまとは相談しながらみたいな感じですかね。

野瀬 恐らく。

鈴木 ああ、はあはあ。あの一、病院は、あの、宇多野病院だけ検討されてたんですか。それとも他の病院なんかも見てたんですか。

野瀬 いや、病院は多分、学校っていう目線でしか見てなかったの。

鈴木 なるほど、なるほど。じゃあ、ということは学校の目線で見て、いろいろこう見てて、で、もう鳴滝は宇多野病院と一緒になのでっていうことで・・・。

野瀬 そうです。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。先ほどの聖ヨゼフ学園っていうのは、いつ頃から関わるようになったんですか、この。

野瀬 僕、もう記憶がないんで。

鈴木 あ、じゃあ相当前ってことなん・・・。

野瀬 多分。生まれてすぐとかやと思う。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。じゃあ、一応、病院との関わりは、聖ヨゼフ学園が最初だったんですかね。

野瀬 生まれるのがどこの病院かは覚えてないんですけど。

鈴木 ああ。で、まあ、あの、宇多野病院に入院するまでの間に、聖ヨゼフ学園で。

野瀬 あ、宇多野の前に、一応、僕、かかりつけが市立病院やったんで。

鈴木 ああ。

野瀬 ヨゼフ、市立、宇多野、市立みたいな感じですか。

鈴木 ああ。じゃあ市立病院っていうのは、また、じゃあヨゼフ学園とは違う病院名だ。

野瀬 違う所です。

鈴木 ああ。じゃあヨゼフと市立病院と。

野瀬 多分。

鈴木 ああ、なるほど。で、宇多野病院に入院された後も、市立病院なんですか、関わり。

野瀬 いや、もうそっからはほぼ・・・。

鈴木 宇多野で。

野瀬 ……宇多野で全部、診てもらって。

鈴木 ああ、はあはあ。なるほど、なるほど。

野瀬 大人になってからっていうか。

鈴木 ああ。

野瀬 は、市立病院と、ちょいちょい宇多野で診れへん病気が起こったりしてたんで。

鈴木 ああ、はあはあはあはあ。なるほど、なるほど。

野瀬 そのときに市立行って。で、まあ、今はなんかあったときは市立病院に行くことになってるんで。

鈴木 ふんふんふん。じゃあ、野瀬さん自身として、えっと、ご自身が脳性まひがあるっていうことを自覚するようになったのは、宇多野病院に入院された後ぐらいなんですか。

野瀬 そうですね。もともと、まあ、もちろん子どもやもんで、その脳性まひがどんな病気かとかもよく分かってない状態なんで。

鈴木 ああ、はあはあ。それが分かることになったのって、小学校とかですか。

野瀬 小学校高学年ぐらいで・・・。

鈴木 あ、そうですか。それは・・・。

野瀬 病気のことを分かりだして。

鈴木 ああ、そうですか。それはどなたのご説明で。

野瀬 支援学校行ってたんで、担任の先生からとか。あの生徒の中に多分、脳性まひの方がいたので、「あの人、なんか変だね」みたいなことを多分、子どものとき言って、そして「同じ障害だよ」みたいなことを言われて。

鈴木 なるほど。その先天性脊髄損傷については小6のときに診断を受けて、で、そのときに自分はそういうってことですか。

野瀬 そうです。

鈴木 ああ。そのとき、えっと、診断を受けたときのお気持ちって覚えていらっしゃいます？ 小6のときって。

野瀬 そうですね。見つかった当初は、なんか「極力、首を動かさないように」とか言われたんで、口しか使えないんで。結構、首を動かすことが多かったんで、使えへんとなるとすごい不便やなっていうショックを受けたんは覚えてますね。

鈴木 あの一、何だろう、その、体は、あの、最初お生まれになったときは、ある程度こう、動かれたんですか。

野瀬 ハイハイとかはできてた。

鈴木 ハイハイはできてた。でも、立ったり歩いたりっていう・・・。

野瀬 立ったりはできない。

鈴木 できなかった。

野瀬 座位は取れてた時期もあって、ご飯も自分で食べれてた時期もあったんですけど。

鈴木 はいはいはい。それは、ということは、それを覚えていらっしゃる、野瀬さんが。

野瀬 辛うじて覚えてるから・・・。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 多分、3歳か・・・。

鈴木 3歳か。

野瀬 ・・・・4歳ぐらいの間なんじゃないですかね。

鈴木 なるほどね。ということは手、手は、じゃあ、ある程度こう、動いてたってことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 食べれたってことは。で、あの一、じゃあ、それがだんだんこう、えっと、座ることができなくなってたっていうのは、どのぐらいの時期なんですか。

野瀬 どれぐらい。

鈴木 小学校の、やっぱり・・・。

野瀬 もう小学校のときには手足は動かなかったので。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 まあ、多分、4、5歳くらいで徐々に落ちていったんじゃないですか。

鈴木 恐らく、じゃあ4、5歳のときにはもう動かなかったんじゃないかっていう。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ。で、えっと、その時点は、でも首は、まあ、ある程度動いてたような感じなんですか。

野瀬 そうだと思います。

鈴木 ああ、はあはあ。でも、それが高学年になると、動かすのが結構大変になってきたってということですか。

野瀬 いや、大変さは全然なかった。

鈴木 あ、そうですか。じゃあ、ある程度こう、えっと、座ることはできなかつたけれども、首はまあ、動いてって。

野瀬 そうです。

鈴木 ああ、はあはあ。寝返りとかも可能だったってということですか。

野瀬 寝返りは自分ではできなかつたですね。

鈴木 ああ、はあはあ。ということは、やっぱり、じゃあ6歳のときに、あ、6年生のときにその診断を受けて、あ、自分、首、動かないんだみたいな、そういうふうに思ったのは。

野瀬 いや、首は動くんですけど。

鈴木 ああ、はあ。

野瀬 あんま動かさないようにっていう先生からの指示で。

鈴木 はいはいはい。あの、そういう何かこう、まあ、ショックというか受けたときって、あの、なんかそういう、あの、気持ちっていうのを誰かと共有することって可能でしたか。その小6のときって。

野瀬 まあ、担任の先生とか。

鈴木 ああ、担任の先生。

野瀬 相談したり。

鈴木 ああ。やっぱり信頼できる人って、担任の先生が大きかったってということですか。

野瀬 当時はそうですね。

鈴木 あ、そうですね。それは特定の、あの、担任っていうのはやっぱり代わるんですか。小学校、ある程度。

野瀬 僕のときはだいぶレアなケースみたいで、1年から6年まで、まあ、産休とかはあったんですけど、同じ先生でした。

鈴木 へえ。そしたら、じゃあ、期間が長い分。

野瀬 そうですね。一番よく分かってたと思います。

鈴木 ああ、そうですね。

野瀬 今、後輩とかに聞いても、そんなことは全然ないから・・・。

鈴木 あ、そうですね。

野瀬 だいぶたまたまやったと思いますけど。

鈴木 へえ。じゃあ、今はもう結構代わったりとか。

野瀬 2、3年置きには代わってる。

鈴木 3年置き。その担任の先生って、なんか教科とか持ってたんですか。特定の教科を。

野瀬 あ、まあ、小学校なので全部の教科。

鈴木 あ、全部ですか。じゃあ、もう、授業を受けるつつつたら、その担任の。

野瀬 ずっと一緒に。

鈴木 あ、そうですね。

野瀬 先生の意向でというか、僕はパソコン使えるっていうのがあったから。

鈴木 はいはいはい。

野瀬 小学校のときは図工っていうんですけど、「パソコン使えるから、イラストレーターを子どものときに学んどいたほうが今後に役立つんじゃないか」って言って、その図工の時間だけ、美術の先生が特別に入ったりはしてましたけど。

鈴木 へえ。それは珍しいことなんですか。美術の先生が特別に入るって。

野瀬 まあ、そうですね。

鈴木 ふうん。

野瀬 普通の小学校の先生やから、1人で全部完結するはずなんですけど。

鈴木 なるほど、なるほど。じゃあ、その担任、担任の先生の方は女性の方ですか。

野瀬 女性でした。

鈴木 はあはあ。じゃあ、その方が野瀬さんがパソコンが好きだっていうことを知って。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、図工の時間に美術の先生にわざわざ来ていただいて。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、この美術の先生というのは、えっと、鳴滝の。

野瀬 鳴滝の、まあ。

鈴木 支援学校の。

野瀬 先生でした。

鈴木 ああ、そうですか。じゃあ、他の、えっと、支援学校を受ける生徒は、そういった美術の先生が特別にっていうことはなかったんですね。

野瀬 僕の、鳴滝ではあんま僕は見たことなくて。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 家庭科を家庭科の先生が教えたりとかは全員あったんですけど。

鈴木 ふんふんふんふんふん、なるほど。えっと、それは何年生のときだったんですか。その、図工の時間に美術をって。

野瀬 それは小学校の5年と6年のときですね。

鈴木 5年と6年。あ、高学年になってから。なるほどね。そのパソコンが、あの、今、野瀬さんが好きだったっていうふうにおっしゃったんですけど、いつからそのパソコンに関心を持たれたんですか。

野瀬 入学したときから先生が触らせてはったんで、多分、勝手に触ってるうちにできるようになって。別に学んだわけではないんやけど。

鈴木 ふうん。

野瀬 適当にいじってみなさいみたいな感じでいじってたら。

鈴木 ふんふんふん。じゃあ、そのときって、えっと、じゃあ、もう 1 年生とか 2 年生とか、そういうときですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 へえ。それはなんか画期的ですよ。

野瀬 そうですね。支援学校ならではっていうのがあると思うんですけど。

鈴木 ああ、なるほどね。えっと、ちなみに、あの、えっと、まあ、ちょっといろいろあれなんですけど、今、学校に移っちゃってるんで、学校の話、せっかくだから聞きたいんですけど。

野瀬 ええ。

鈴木 えっと、鳴滝の、えっと、支援学校ですよ。

野瀬 ええ。

鈴木 で、小、中、高。え、高まであるんですけど。

野瀬 高まであります。

鈴木 あ、そうですね。あの、病院と、その鳴滝の支援学校って、距離的には、あの、離れてるんですか。どのぐらい・・・。

野瀬 いや、僕が高校 1 年の途中までは、ほんまゼロ距離やったんですけど。

鈴木 ふんふんふん。

野瀬 高 1 の終わりに病棟を新しく建て直さって、まあ、そっからは歩いて 5 分ぐらいかかるかな。

鈴木 じゃあ、えっと、高 1 のときに建て直しされるまでは、結構距離があった。

野瀬 いや、高 1 までは距離がなかったです。

鈴木 あ、距離が逆になかった。えっと・・・。

野瀬 ほんま、ひっついてたので。

鈴木 あ、ひっついてた。あの、要するに、外、出なくても中につながってる。

野瀬 そうですね。

鈴木 じゃあ、病棟と、その、えっと、学校との間の廊下みたいのがあるっていうことで

すか。つなぐ。

野瀬 まあ、そうですね。

鈴木 ふーん。じゃあ、そこを渡ればもう学校に行ってみたいな。

野瀬 もう一步向こうへ行ったら学校みたいな感じ。

鈴木 あ、そうですか。あの、えっと、生徒数って何人ぐらいいらっしたんですか。鳴滝の。

野瀬 生徒数は。

鈴木 当時は。

野瀬 僕が小学校低学年のときは、まあ、養護学校っていう名前やったんですけど。

鈴木 はいはいはい。

野瀬 そのときは身体障害者が 30 人ぐらいいたのかな。

鈴木 ふーん。

野瀬 僕が小学校 2 年のときに学校名が変わって。

鈴木 支援学校に。

野瀬 いや、鳴滝総合養護学校に変わって。

鈴木 ああ。

野瀬 で、そっから、あの、知的障害者とか発達障害の方を受け入れるようになって。

鈴木 ふんふんふん。

野瀬 で、まあ、身体障害は結構、まあ、卒業と伴ってがくんって減ったんかな。15 人か、半分ぐらいまでなって。

鈴木 ふんふんふん。

野瀬 で、いつからやったかな。小学校高学年ぐらいのときに支援学校に変わって。

鈴木 はいはいはい。

野瀬 で、もうそっからは 10 人いくかいかないかぐらいの身体障害者。知的とかのほうは結構、70 とか 80・・・。

鈴木 70、80。

野瀬 ……ぐらいいはいたと思いますけど。

鈴木 あ、そうですか。じゃあ、割合がかなり変わってくるんですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 全体で言うと、じゃあ 100 人ぐらいいはいるような学校だったんですね。

野瀬 そう。100 人未満ぐらい。

鈴木 それは小学校の話ですか。

野瀬 小学校までは。もう中、高では身体障害がほぼ、僕と、あと 2、3 人いるぐらいの感じで。

鈴木 ふーん。ということは、中、高はもっと、じゃあ、身体の人が少なくなって。

野瀬 高校とかは 3、4 人やったから。

鈴木 高校、3、4 人。

野瀬 今も確か 2 人とかやから。

鈴木 今、2 人。あ、そうですか。じゃあ、えっと、知的とか発達の人は何人ぐらいなんですか。中、高は。

野瀬 高校だけなんですけど、知的と発達が。

鈴木 はい。

野瀬 1 クラス 15 人とかやから。で、4 クラスあって。

鈴木 ふんふんふん。60 人。

野瀬 ぐらいだった。

鈴木 ああ、結構多いですね。ということは、小学校、鳴滝総合支援学校に行った知的と発達の子たちは、中、高も同じ所に行く子が多いんですかね。

野瀬 身体障害の子らは割と高校まで行く子は多かったですけど、知的は高校しかなかったんで。

鈴木 あ、なるほど。知的は高校しかなかった。小学校はなかった。

野瀬 は、ないです。

鈴木 あ、そうですか。えっと、じゃあ、ちょっと確認なんですけど、先ほどの、あの、小学校のときっていうのは、えっと、身体の人がほとんど。

野瀬 そうです。全員。

鈴木 あ、全員、身体の人。で、途中で鳴滝総合支援学校に変わったときも、小学校は身体・・・。

野瀬 小、中は身体だけです。

鈴木 小、中は身体だけ。

野瀬 高校だけは知的と発達の子らが入ってきた。

鈴木 あ、なるほど、なるほど、なるほど。

野瀬 まあ、見た目では普通の、ごく普通の方なんですけど。

鈴木 うんうんうん。で、高校は、えっと、身体の人がもう2、3人ぐらいで。

野瀬 そうですね。

鈴木 知的と発達の人が、もう60人ぐらいいたっていう。なるほど、なるほど。ふーん。じゃあ、えっと、でも、小学校のときの身体のかたがたって30人ぐらいいらっしゃって、中、高になると3人ぐらいに減ってるっていうことは、残りの25名とかそのぐらいの人たち、どこに行かれるんですか。

野瀬 高校卒業して、ほぼ僕が入った頃には、高校生は多分、20～30人いた感じなのに、卒業してから、まあ、地域に行ったり、宇多野に残ったりっていう感じやったです。

鈴木 ふーん。えっと、小学校のときに身体の人が大体30人ぐらいいらっしゃって、中、高になると、その方はどういうふうになる。

野瀬 高校、小学校と高校しかないような感じやったんで。中学生がほぼいなかったんで。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 僕が若かったときは。

鈴木 ああ。

野瀬 で、小、中、高があるんですけど。

鈴木 はいはい。

野瀬 中学生も何人かいたのはいたと思うんですけど。

鈴木 ああ、はあはあ。で、えっと、小学校のとき、身体の方は大体30人ぐらいいらっしゃったんですよ。

野瀬 そうですね

鈴木 で、高校になると3、え、3人とか。

野瀬 僕が高校のときは・・・。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 ・・・・3、4人とか。

鈴木 ふーん。じゃあ、小学校のときにいた30人ぐらいの人たちっていうのは、小学校を卒業した後って、どこに行かれていますか。

野瀬 結構その時期から支援学校と一般校を選ぶ子が増えてきたんで。

鈴木 なるほど。

野瀬 選べるようになったんで。

鈴木 なるほど、なるほど。

野瀬 みんな一般のほうを選ぶと思うんですよね。

鈴木 あ、そうですか。なるほどね。

野瀬 あとは鳴滝のアクセスが悪いので。山奥だけに。

鈴木 ああ、そうですか。でも、小学校時代はやっぱりご病気とかいろんなご事情で、入院されながらってということですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 なるほどね。あの、その中の、えっと、ごめんなさい。小学校は30名ぐらい身体の人がいらっしやって、入院されてる人ってどのぐらいだったんですか、その、宇多野に。

野瀬 いや、小学生は30人もいなかったですけど。小、中、高、合わせて。

鈴木 あ、小、中、合わせて30人。

野瀬 ぐらいで、小学校の時代でも1年から、まあ、いない学年もいたんですけど、1年から6年で5、6人かな。小学生は。

鈴木 あ、そうですか。宇多野に入院されてる人。

野瀬 宇多野は、多分、3、4人とか。

鈴木 3、4人。

野瀬 家から通う人が3、4人、一緒ぐらいとか。

鈴木 あ、一緒ぐらい。これ、小学校全体でってことですか。

野瀬 全体で。だから小学校でいたんは、多いときで10人ぐらいかな。

鈴木 あ、そうですか。ということは、じゃあ小学校の、えっと、生徒さんって10人ぐらい。

野瀬 僕の知っているマックスはそれぐらい。

鈴木 あ、そうですか。それは1年生から6年生まで全員合わせて10人ぐらいっていうことですね。で、5人ぐらいが家からっていうか、在宅。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、残りの5人ぐらいも宇多野病院に入院されてる。

野瀬 そうです。

鈴木 じゃあ半々ぐらいで。で、中学になると、中学校は、えっと、野瀬さんがいらっしやったときって20人ぐらいとかですか。

野瀬 いや、僕、中学のときは・・・。

鈴木 小、あ、中学校ですね。

野瀬 ・・・結構、全体が多かったんで、僕がもう中学行く頃には、多分、半分ぐらい高校に行ってはったんで、多分、半分、5人以上ぐらいで、5、6人かな。

鈴木 あ、中学校全体で5、6人。あ、そうですか。で、その中で、えっと、在宅から通ってる方って中学校のときはいらっしやったんですか。

野瀬 は、2人ぐらいいました。

鈴木 2人ぐらい。じゃあ、まあ、やっぱ半分ぐらいなんですね、じゃあ。で、残りの3人ぐらいが・・・。

野瀬 病院から。

鈴木 ・・・病院からってということで。なるほど、なるほど。あ、何となく分かってきました。で、えっと、高校になると、今度はじゃあ、逆に知的とかの人が30人ぐらいいてみたい。その人たちはもちろん在宅ですもんね。

野瀬 そうね。普通に市バスとかで通ってきて。

鈴木 ああ、そうですよね。で、野瀬さんたちが、大体2、3人ぐらい高校生で一緒だった。

野瀬 そうです。

鈴木 はあ、なるほどね。

野瀬 その1人には大藪君も入ってますけど。

鈴木 ああ、そっかそっか。その3人、えっと、高校時代3人いらっしやったんですよね。生徒さんは。

野瀬 そうです。大藪君は家から通ってた。

鈴木 大藪さんが1人いて、野瀬さんがいて、で、あともう一人が病院の入院されてる人。

野瀬 そうです。

鈴木 3人。

野瀬 いや、高校はどうやったかな。よく転校生とかもあったりしたから。

鈴木 ああ、転校生。

野瀬 6人ぐらいいたかもしれない。

鈴木 あ、6人ぐらい。

野瀬 マックスは。

鈴木 大藪さん以外に在宅から通われてた人っていらっしやったんですよね。2人とか3人とか。

野瀬 高校のとき？

鈴木 はい、高校のとき。

野瀬 大藪君以外、もう一人いた。

鈴木 あ、もう一人いた。え、ちなみに大藪さんは高校のときからですか、在宅は。

野瀬 いや、小5からかなんか。

鈴木 あ、小5ですか。じゃあ、もうそのときから野瀬さんは大藪さんのことはご存じだった。

野瀬 そうですね。

鈴木 はあはあ。クラスって、ごめんなさい、えっと、年齢が異なる人が一緒になるんですか。

野瀬 いや、なんか、まあ、そんだけ少人数なんで、なかなか1人の人、担任は難しいんで。

鈴木 あ、はあはあはあ。

野瀬 で、まあ、小学校のときから僕は先輩と同じクラスに入って。

鈴木 あ、なるほど、なるほど。じゃあ、えっと、小学校のときは大体10人ぐらいいらっしゃって、それは1クラスになるんですか。

野瀬 いや。

鈴木 何クラスになるんですか。

野瀬 支援学校で1人、身体障害が見れる数みたいなのが決まってて、4人までやったです。

鈴木 なるほど。

野瀬 3、4人で1人。3人で1人か。

鈴木 ふんふんふん。

野瀬 で、4人になった場合は、多分、補助教員みたいなのが1人付いて。

鈴木 はいはいはい。ということは何クラスあったんですか。小学校のときは。

野瀬 小学校、2クラスしか。

鈴木 2クラス。

野瀬 教科書、使えるいうんと、若干、知的のダウン症の子とかのクラスいうても分けてあったんで。言語障害だったり。

鈴木 はいはいはい。なるほど、なるほど。で、野瀬さんは、じゃあ、教科書、使える所にいらっしゃって。

野瀬 そうです。

鈴木 で、野瀬さんのいらっしゃったクラスは3、4人いらっしゃって、えっと、先輩もいたってということですよ。

野瀬 そうですね。大藪君が一番先輩なんです。

鈴木 大藪君。

野瀬 もう一人、友達と。

鈴木 ああ。大藪さんと同年齢なんですって、野瀬さんは。

野瀬 いや、彼が2個上です。

鈴木 2個上。ということは、あの、学年で言うと。

野瀬 僕が小1のときは、彼は多分、小3とかです。小3のときは会っていないから知らないですけど。

鈴木 じゃあ、小1のときに小3の人とかもいたってということですか。変な話、クラスに。

野瀬 は、たまたまいなかったですけど。

鈴木 あ、いなかった。

野瀬 まあ、小4の人はいましたけど。

鈴木 あ、小4の人がいた。

野瀬 と、同じクラスやった。

鈴木 へえ。

野瀬 先生は大変やったと思う。

鈴木 どんなふうに授業ってされるんですか、そういう。

野瀬 なんか、半分算数やって、反対では社会やってたり。先生1人で、教えながら教えながらやから。

鈴木 なるほど。

野瀬 このプリントやってる間に、隣、教えるからみたいな感じに。

鈴木 ふんふんふんふんふん。じゃあ、なんか個別に違うことを4人の人がやってるみたいな感じですか。ふーん。まあ、マンツーマンと言えばマンツーマンになるんですかね、比較的。

野瀬 まあ一応。大藪君が来てからは、多分、3人になったんで、生徒数が。

鈴木 ああ、それまで何人だったんですか。

野瀬 僕は2人やったから。

鈴木 あ、2人でやってた。

野瀬 小1と小4やって。

鈴木 ああ、そっかそっか。

野瀬 で、大藪君が小5で来て。

鈴木 ああ。

野瀬 小4で来たんかな。その辺で来て、3人になって、で、なんか先生が多分、大変や

から、「さすがに三つの学年のを教えられへん」って言わはって。で、大藪君が小5のときに小6の勉強をやって、で、小6の人が小5の勉強を多分、入れ替えはったと思うんですけど、あえて。ひとまとめにできるだけさせたいもんで。で、まあ、僕だけ学年どおりの授業をしてもらって。

鈴木 ふーん。野瀬さんが、えっと、学年、上の授業を・・・。

野瀬 いや、僕はもう学年順で授業してた。大藪君ともう一人の子は逆。大藪君が5年のとき、大藪君は5年の勉強して、もう一人の子が6年やったけど5年の勉強して。

鈴木 えー。で、野瀬さんは4年だけど。

野瀬 僕は4年の勉強。

鈴木 4年の勉強。で、それで何とかやれたってということなんですか。

野瀬 多分。

鈴木 ああ、なるほどね。三通りは無理だけど、二通りだったら大丈夫だみたいな感じで。

野瀬 まあ、辛うじて。

鈴木 辛うじて。ああ、先生も大変ですよ。なるほど。

野瀬 一応、補助教員みたいなんはいたんですけど。

鈴木 ああ、はあはあ。

野瀬 で、まあ、もちろん介助しながらやから。

鈴木 あ、介助。あ、そっか、介助しながらですもんね。確かにそうですよね。介助というのは、その。

野瀬 ま、鉛筆持たしたりとか。

鈴木 ああ。

野瀬 「ちょっとお茶飲ましてください」って言ったら飲ませなあかんしみたい。な。

鈴木 はいはいはい。ああ、なるほどね。あと、おトイレとかってことですか。

野瀬 そうです。

鈴木 基本、全部の介助が必要な状況なんですよ。

野瀬 そうです。

鈴木 はいはい。

野瀬 それもあって、多分、美術を任して、家庭科を別の先生に任したりはしてはったと思うんですけど。

鈴木 うんうん。

野瀬 ほんまは小学校やったら先生 1 人で完結はできると思うんですけど、それやと多分、先生の休憩時間がないんで。

鈴木 なるほど。教科としては全てやるんですよね。算数と国語と理科と社会……。

野瀬 僕らが習うのは、先生の教えんのは、家庭科と美術や図工は他の先生に任してたりはしはった。

鈴木 ああ、そうですか。体育なんかはどうされてたんですか。

野瀬 体育は、場所は中、高、みんな一緒に体育館行って、みんなができる競技を。支援学校の間では卓球バレーっていうのがはやってて。

鈴木 卓球？

野瀬 卓球バレー。

鈴木 あ、卓球バレー。卓球バレーってどうやるんでしたっけ。

野瀬 卓球台で。

鈴木 はいはいはい。

野瀬 6 対 6 で。

鈴木 はいはいはい。

野瀬 ルールはほぼバレーなんですけど。

鈴木 ふーん。卓球なんですか、基本的には。台で。

野瀬 卓球は、でもネットの上なんですけど、卓球バレーなんで下。

鈴木 ああ、なるほどね。

野瀬 下、転がして、極力バレーのルールで。

鈴木 ふーん。じゃあ、それをみんなで作るっていう。

野瀬 そうです。か、まあ、車いすサッカーとか。

鈴木 あ、はいはい。

野瀬 車いすドッジボールとか。

鈴木 ああ、はあはあはあ。

野瀬 体育の先生が考えたルールとかやる。

鈴木 ふーん。なるほどね。野瀬さんはその中でなんか好きな教科って、なんかあったんですか。何が好きだったんですか。

野瀬 まあ、体育と美術は好きやったですけど。

鈴木 ああ。まあ、一コマ大体 45 分とか、それは変わらないですよ。授業の時間っていうのは。

野瀬 いや、支援学校になる前が、確か 35 分とかで。

鈴木 35 分。

野瀬 支援学校になってから 40 分になったのかな。

鈴木 なるほど。えっと、養護学校時代が 35 分で、支援学校になってから 40 分になった。支援学校になるっていうのは、やっぱり文科省の規定が変わってからすぐ支援学校に変わりましたよね。

野瀬 恐らく。

鈴木 はいはい。なんか、あの、例えば、その、教科で機能訓練的なものとかってありましたか。

野瀬 なんか自立活動っていう時間が週 5 時間入ってたんですけど。

鈴木 週 5 時間、はい。

野瀬 その時間はリハビリ、普通の学校では受けないと思うんですけど、リハビリ受けたり。

鈴木 学校で。

野瀬 学校。まあ、病院、近かったんで、リハビリ室へ行ってなんですけど。

鈴木 はいはい。ああ、学校の時間に病院に行って。

野瀬 そうそう。

鈴木 週 5 時間。

野瀬 週 5 時間、毎日。

鈴木 毎日。

野瀬 毎朝、1時間目が自立活動っていう時間で、リハビリを前半20分して、後半は手、動かす訓練とか、なんか物を組み立てて手の機能を維持したり、あとはなんかそれぞれの課題。

鈴木 それはみんなで、えっと、ごめんなさい、あ、3人がいるっていうことですか。小学校のときっていうのは。

野瀬 自立活動は、小、中、高、みんな一緒やった。

鈴木 あ、小、中、高、みんな一緒。豆をこう、箸で取ったりとか、そういうこともやるんですか。

野瀬 多分、やってる人もいたと思います。

鈴木 ああ。ということは、あ、人によってやるのが違ってると。

野瀬 そう。まあ、人によって動く箇所が違ったりするから。

鈴木 ああ、なるほどね。

野瀬 ビーズに糸通すとか。

鈴木 ああ。野瀬さんは何やったんですか、そのとき。

野瀬 僕はもう口しか動かないんで、口でできることを探しながら。

鈴木 ふーん。じゃあ、えっと、口が動くっていうことで、何かそれでやったりとかするんですか。

野瀬 ま、絵、描いたり。

鈴木 ああ。

野瀬 パソコン操作してたり。

鈴木 えっと、それは口でっていうことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ、はあはあ。あの、何ていうんですかね。そういう機能訓練的な時間って、野瀬さんご自身は必要だったと思いますか。ご自身のことで役に立ったっていうふうに思いますか。

野瀬 そうですね。その時間に、結構、パソコンのことを学べたっていうのもあるから。

鈴木 他の周りの人はなんか言ってましたか。なんか、みんな野瀬さんと同じように楽しく過ごされてましたか。

野瀬 そうですね、基本。

鈴木 あ、そうですか。嫌だったりつらいとかって言う人っていなかったってことですか。

野瀬 障害の中には進行が早かったり遅かったりがあって、「なんできょうは手が動かへんのや」って悲しんで。悲しんでというか、ショック受けてっていうか、子もいたはいたかな。

鈴木 ああ。なんか、あの、筋ジスの方だと、なんかこう、起立訓練みたいな感じで、ずっと立つことが。

野瀬 ああ。

鈴木 なんか、そういうこともやってた。

野瀬 やってる人もいました。

鈴木 ああ。それはなんか言ってました。そういう、なんか大変だとかつらいだとか。

野瀬 いや、なんか、リハビリ室に起立台っていう台があって、その台に乗って、それで起きて、その、なんかテーブルの上で作業してたり、楽しそうに。

鈴木 してました？

野瀬 作業はしてはった。

鈴木 あ、そうですか。あの、立ちながらってことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 へえ。じゃあ、そのときになんか、嫌だ、こんなことやりたくないとかっていうふうに言う人は、見たことはないっていうことですか。

野瀬 あんまないですかね。

鈴木 あ、そうですか。なるほどね。この辺りも結構、人によって違うんですかね。なんか「すごく大変だった」って言う人もいるみたいで。

野瀬 ああ。

鈴木 でも、野瀬さんが見た限りでは、まあ、おおむね楽しそうにしてたっていう。

野瀬 まあ、内面どう思ってるか分かんない。

鈴木 あ、内面どう思ってるか分かんないけど。でも、野瀬さんご自身の、そのパソコンで絵描いたりするっていうのは、ご自身にとってよかったなっていうような。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ、はあはあ。なるほど。まさか野瀬さんに対して起立訓練なんかやりませんも

んね。

野瀬 いや、いつか、低学年ぐらいまではやってた。

鈴木 あ、そうですか。それはどう思われるんですか。野瀬さんご自身は。

野瀬 いや、別に。たまに立ちくらみみたいなん、するようないで。

鈴木 ハハハハ。そこまで苦痛ではなかった。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ。あるいは、逆にそれをやることで、なんか効果があるんじゃないかとかって思ったってことですか。

野瀬 脚の曲げ伸ばしが滑らかにできるようにはなったりしました。

鈴木 へえ。

野瀬 固まってしまうんで、動かさんと。

鈴木 なるほど。

野瀬 で、今はそんな脚、伸びなくなったんですけど。やらないから。

鈴木 ああ、そっかそっか。それはどう思われます？ あの、やったほうがいいと思います？ 野瀬さんは。

野瀬 まあ、できるだけ伸ばしといたほうが、着替えとかでも伸びたほうが多分しやすいと思うんで。

鈴木 あ、なるほどね。じゃあ、なるべくその当時やってたような起立訓練じゃないですけど、そういうものって今でもやったほうがいいと思うんですか。

野瀬 体の状況にもよりますけど。

鈴木 ああ。

野瀬 まあ、できるならやっとならしたほうが。

鈴木 ああ、そうですか。

野瀬 リハビリとかは。

鈴木 ああ。また、ちょっと地域の話でまた、あの、改めて後日お伺いしたいと思うんですけど、今ってそういう訓練って、受けたいと思ったら受けられるんですか。

野瀬 一応、僕の所は週3でリハビリには来てもらってて。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 体の機能全般を維持できるように。

鈴木 あ、なるほど。それは野瀬さんは、そういうリハビリの訓練は必要だっていうふうに思ってるってことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ、はあ。で、今、受けていらっしゃるリハビリは、自分にとって意味があるっていうか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ、はあ。それ、宇多野の病院と比べると、地域とは違いますか。それとも基本的に変わらない。

野瀬 あんま変わったらあかんとは思いますが、結構、差はある気がします。

鈴木 差はある。どっちがどっちなんですか。

野瀬 在宅のほうが結構、親身になって考えてくださっている気はします。

鈴木 ふーん。やり方が違うってということなんですか。

野瀬 うーん、どうなんやろ。多分、病院は結構、先生とかドクターとか見張られて。見張られてって言ったならあれやけど、まあ、指示の下やから。

鈴木 なるほど。

野瀬 在宅も先生の指示の下ではあるんですけど、いかに外出できるようにするかとかやから、病院は、あの、外出とかは多分、あんま考えてはないから。

鈴木 なるほど。目的というか。

野瀬 そうですね。

鈴木 違うってということなんですね。方法的にも違ったりとかするんですか。体のこう、動かし方とか。

野瀬 は、そんな変わらない。

鈴木 あ、それは変わらない。だけど、気持ちのありようとか言葉掛けとか、違いを感じる。

野瀬 そうですね。

鈴木 へえ、そうですか。在宅のほうが親身になって考えてくれるっていうのは、それは野瀬さんのことを会話したりとか、そうやりながらってということなんですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん、なるほどね。やっぱ病院だと見張られてるっていうか、その。

野瀬 ドクターがあかんって言ったら、もうやはらはらへんから。在宅もドクターがあかんって言ったら、多分やはらはらへんと思うけど。

鈴木 うん。

野瀬 今のステーションしか使ったことがないから、よそがどういう感じなんかとかは全然分からんけど。

鈴木 ふんふんふんふんふんふん。でもなんか、うん、同じ医師の指示の下にやってるけど、在宅のほうが、なんか目的意識が。

野瀬 そうですね。

鈴木 持ってやってくださって、病院のほうは目的意識がないっていうわけでもないのか。どういう・・・。

野瀬 多分、ないわけではないと思うけど。もちろん機能は維持せなあかんし。

鈴木 なるほど。でも何となく野瀬さんとしては、なんか親身になって対応してくれるのは在宅のほうかなっていう。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん、なるほどね。違うんだな。うん。あの、さっき、あの、パソコンで学べたっていうのは、それは野瀬さんのご希望に即して、そういうリハビリを、宇多野病院としては考えてくれたっていうことなんですかね。

野瀬 いや、宇多野のときは高校までパソコンは触らしてもらえず。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 学校行ってるときだけやったんで。

鈴木 ああ、なるほど。学校に行ってるときの、その自立訓練の時間に使わせてもらって、で、それは、えっと、野瀬さんのご希望を担任の人が聞いて、そういうリハビリっていうか、その自立訓練のプログラムを考えてくださったっていうことですか。

野瀬 僕の希望っていうか、先生がこういうのをやっといたほうがいいっていう、先生の意向という。

鈴木 あ、なるほどね。でも、それは野瀬さんのやりたいことでもあったっていう。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふんふんふん。あの、口で、じゃあ操作をして、パソコン上に絵を描くっていう感じなんですか。

野瀬 そうですね。絵描いたり文字書いたり。

鈴木 文字書いたり。で、その道具というか、そのパソコンっていうのは病院の中にあつて。

野瀬 いや、まあ、基本、学校にあつて。

鈴木 あ、学校にあつて。

野瀬 それを、まあ、リハビリ室まで持ってきはったり。

鈴木 へえ。そのパソコンって、あれですよ。あの、ラップトップじゃなくて、その、デスクトップですか。

野瀬 いや、ノート。

鈴木 あ、ノート。

野瀬 が多かったかな。

鈴木 へえ、なるほどね。それ、あの、どうしてわざわざ、この、何ていうんですかね。え、ごめん、場所はどこでやるんですか。自立訓練を病院の中の、なんかそういう特別なお部屋があるんですか。

野瀬 そうです。リハビリ室っていう所が。

鈴木 リハビリ室。比較的広いんですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。小、中、高の全員がいるわけですよ。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。

野瀬 まあ、全員、車いすやから。

鈴木 ああ。

野瀬 それなりの広さがないと。

鈴木 さっきの、ごめんなさい、知的と発達の人が30人ぐらい高校にいる。

野瀬 は、別にいる。

鈴木 その人たちもいるんですか。

野瀬 は、いない。

鈴木 あ、来ない。車いすの方だけ。ということは・・・。

野瀬 20～30人ぐらい・・・。

鈴木 あ、20～30人。

野瀬 ……入れる部屋だった。

鈴木 じゃあ、残りの知的とか発達の人って、その時間って別のことをやってるんですか。

野瀬 別の。まあ、一緒になるのは、ほぼ委員会活動とか部活だけなんで。

鈴木 ああ、なるほどね。あ、そういうことか。

野瀬 学科が違うんで。

鈴木 学科が違う。え。

野瀬 学科分けされてて。

鈴木 何ていう学科なんですか。

野瀬 普通科と職業学科に分かれてて。

鈴木 はいはいはいはい。

野瀬 身体障害とかのほうは普通科に入れられて。

鈴木 なるほど。

野瀬 知的と発達の子は職業学科で、職業学科のほうは高校だけなんですけど、高卒資格は取れないんですね。

鈴木 なるほど、へえ。

野瀬 職業訓練だけなんで。

鈴木 なるほどね。

野瀬 ちょいちょい美術とか、そういうのは、こう、あったりするみたいなんですけど。

鈴木 ふんふんふんふんふん。ああ、で、あ、そっか。職業学科で、美術とかは一応、あるけれども、一応、職業学科でっていうことですか。でも、普通科はいろんな科目をやるっていう。

野瀬 普通の、あの、教科書の教科を。

鈴木 なるほどね。じゃあ、基本、あの、野瀬さんがパソコンに関心を持つようになったってというのは、この自立訓練の時間が大きかったってということですか。

野瀬 ほぼ全教科パソコンを使って、その、プリントとか打ったりしてたんで。

鈴木 あ、そうなんですか。

野瀬 ノート取れない代わりに。

鈴木 なるほど。あ、じゃあ自立訓練はもちろん絵を描いたりしてやるけれども、それだけじゃなくて、全部の教科で。

野瀬 そうですね。

鈴木 へえ。え、ごめんなさい、1人1台とかですか。

野瀬 いや、1人1台になった時期は、多分、小学校の後半ぐらいからかな。

鈴木 ふーん。じゃあ、それまでは。

野瀬 まあ、1部屋1台みたいな感じ。

鈴木 1部屋1台。じゃあ、それを3人で見たり。

野瀬 そうです。

鈴木 はあはあ。で、えっと、どういうふうにするんだったっけ。えっと、ノートを取る代わりにそれで打つとか、そういうことですか。

野瀬 そうです。

鈴木 ふーん、なるほどね。

野瀬 作文とかもそれで書いたり。

鈴木 なるほどね。そのときって、えっと、野瀬さんはどういうふうにしてパソコンを打つんですか。

野瀬 マウス置いて、ドラッグボールっていうのを顔の横に置いて、まあ、それを転がして、画面上にキーボード出てくるんで。

鈴木 なるほど。

野瀬 それを画面クリックして。

鈴木 ふんふんふんふん。

野瀬 文字を打っていく。

鈴木 ふーん。え、そのときは野瀬さん、手は動く状況だった。

野瀬 手は動かないです。

鈴木 動かないで。

野瀬 もう口……。

鈴木 あ、口で。

野瀬 口と顎だけ。

鈴木 あ、口と顎で操作して。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ、はあ、なるほどね。他の方もそんな感じでやるんですか。

野瀬 手、動く方が多かったんで。

鈴木 あ、そうですか。じゃあ、もう、手で自分で操作してって。

野瀬 そうですね。

鈴木 なるほどね。

野瀬 そこで京都新聞の記事で、ちょうどあの壁の所。

鈴木 あ、これですか。

野瀬 それがパソコンやっていた。

鈴木 へえ。ああ、なるほど。これ、どなたですか。

野瀬 それ、僕です。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 多分もう……。

鈴木 あ、ちょっとこれ、写真撮って……。

野瀬 ええ。

鈴木 すみません。

野瀬 5年ぐらい前の記事。

鈴木 へえ。

野瀬 JC 入る前に。

鈴木 ああ、そうですか。ちょっと後で読ませてもらいます。

(シャッター音)

鈴木 なるほどね。じゃあ、小学校 1 年ぐらいのときから、そういう、パソコンを使って打ったりとか。

野瀬 そうです。

鈴木 なるほどね。で、えっと、そういうふうにして、パソコンに関心を持っているって、いうことを担任の先生は知ることになって、えっと、図工の時間に美術の先生をわざわざ連れてきていただいてっていうことですね。それはやっぱり野瀬さんにとって大きかったですか、そういう授業って。

野瀬 そうですね。あの新聞記事、まあ、僕、去年の 9 月から JC に入ったんですけど、その前まではよそで就労支援を受けながらデザイナーをしてたんで。

鈴木 ああ。

野瀬 小学校のときにイラストレーターを勉強してなかったら、多分やってなかったんで。

鈴木 なるほど。え、ちなみに今って。今もやってらっしゃるんですか、イラストは。

野瀬 今、ほぼできてはいないですけど、たまに JC でなんか「チラシ作って」とか言われたら・・・。

鈴木 ああ、なるほどね。

野瀬 ……やりはしますけど。

鈴木 いろんなイラストを描かれるんですか。

野瀬 イラストはほぼ最近描いてないですけど。ほぼチラシとかのデザインなんで。

鈴木 ふーん。あの、男女比ってどんな感じでした？ やっぱ男性のほうが多い感じですか。

野瀬 ほぼ男ですね。

鈴木 ほぼ男。女性の方っていらっしゃいましたか。

野瀬 僕が中学のときに高校生が 1 人転校してきてとか、そんな。知的とか発達のほうは何人かはいましたけど。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 身体障害は、ほぼいないに等しかった。

鈴木 なるほど、なるほど。学校での生活って、まあ、全般的に見て、学校自体は野瀬さんとしてはどうでした？

野瀬 高1までは割とよかったかなとは思いますが。

鈴木 高1まで。

野瀬 高1の終わりから病棟が移転した関係で、学校に行けなくなってしまって。

鈴木 え、高1の終わりから学校が移転したんですか。

野瀬 いや、病棟が移転したんで。

鈴木 あ、ごめんなさい、病棟が移転。

野瀬 学校に行けなくなって。医療的ケアとかをすぐに受けれる状況じゃなくなったっていうので、病院から「もう学校に行かないでください」って言われて。

鈴木 えー。

野瀬 で、まあ、院内学級みたいな部屋を特別に病院が用意して、そこまで先生が来て、授業教えてくれたりはしてたんですけど、火とか使えへんし。

鈴木 何を使えない。

野瀬 火とか使えないんで。

鈴木 火、火ですか。はあ。

野瀬 その、理科の実験だったりができひんし、家庭科もできひんし。まあ、縫いもんぐらいはできるけどみたいな。

鈴木 はいはいはいはいはい。なるほどね。

野瀬 まあ、でも先生もそれは予想してなかったみたいで、高校、高2から授業が選択できるんですけど、で、普通に食文化っていう授業、取ってたけど。

鈴木 食文化。

野瀬 調理実習とかして食を知るみたいな、多分、授業なんですけど。

鈴木 なるほど。

野瀬 先生もそれは予想外で、「高2の授業、どうしよっか」みたいな感じになっちゃって。

鈴木 なるほどね。

野瀬 体育も体育館に行けなくなったんで、ほぼできなかったから。

鈴木 病棟が移転っていうのは、えっと、ごめんなさい、建物自体が変わったってことなんですか。

野瀬 建物も、場所も変わった。

鈴木 場所が変わった。新しく建て替えたんですか。

野瀬 新しく建て替えた。

鈴木 はあ。それって、高1の終わりって、えっと、ごめんなさい、何年頃ですか。

野瀬 何年だ。今、僕が20、今年で5やから、高1の終わり、16歳のときやから。

鈴木 10年前。2011年とか12年とか。

野瀬 多分その辺。

鈴木 それは、あの、病棟が古くなったりとかしたってことですか。

野瀬 老朽化はしてました。

鈴木 老朽化ですか。全体的に、じゃあ、そういうふうにならなくて新しく建て替えたんですか。

野瀬 そう。全く違う場所なんで。

鈴木 へえ。で、えっと、ごめんなさい、場所が移転して距離が遠くなったっていうことなんですかね。

野瀬 そう。歩いて5分ぐらいで。

鈴木 歩いて5分。で、しかも中ではつながってない。

野瀬 中ではつながってない。

鈴木 あ、外に一回出てってということですか。で、それで・・・。

野瀬 渡り廊下のなんは、屋根だけはあったんですけど。

鈴木 屋根、ああ。

野瀬 学校行くための。

鈴木 なるほど。ということ、あ、渡り廊下ね、なるほどね。じゃあ、建物の中で今まで移動できたのが。

野瀬 が、できなくなって。

鈴木 できなくなって、で、えっと、ごめんなさい、そのときに医療的ケアって、えっと、ごめんなさい、えっと、それはどういうことですか。

野瀬 たんの吸引とかがあったんで。

鈴木 ちなみに、ごめんなさい、あの、呼吸器系の機能が衰えていったのっていつ頃だったんですか、野瀬さんは。

野瀬 呼吸器系はほんま幼少期から弱くて。

鈴木 あ。

野瀬 まあ、でも気管切開したのは小4のときなんですけど。

鈴木 小4。ということは、えっと、小学校時代はたんの吸引とかも学校で。

野瀬 小4までは吸引とかもなかったもんで。気管切開してなかったんで。

鈴木 ああ、はあはあはあ。

野瀬 気管切開してから吸引が要るようになって。まあ、病院と学校は普通につながってたんで。

鈴木 なるほど。

野瀬 吸引ってなっても、まあ、すぐ病院に帰って。

鈴木 なるほど。

野瀬 看護婦さん呼んでしてもらって。

鈴木 なるほど、なるほど。あ、そういうことですか。じゃあ、学校で何かその、もちろんそういう吸引をするというわけではなくて。

野瀬 ではなくて。

鈴木 1回病院に戻って。

野瀬 そうです。

鈴木 じゃあ、ごめんなさい、えっと、じゃあ学校に行く前の段階で、一応、吸引して行くって感じなんですか。

野瀬 いや、たんがいつたまるかが分からないので。

鈴木 なるほど。たまったら、もう戻ると。それって大体、あの、どのぐらいの頻度で行

くんですか。

野瀬 季節とか体の状態にもよるんですけど、当時は1日1回、2回ぐらいですかね。

鈴木 じゃあ、そんなに行かないですよ。

野瀬 そんなには。でも、もしたまったときに、確かに移動中5分も使って病院行くと、多分、持たないんで、たんが詰まって窒息したりするんで。

鈴木 ふんふんふんふん、そっか。じゃあ、そういう医療的ケアが必要になったのは、気管切開をした小4以降。

野瀬 そうですね。

鈴木 それまでは特になく。

野瀬 そうですね。

鈴木 はあはあ。でも、小4以降に吸引が必要だったとしても、一応、病棟が近いので、そこに行って吸引をして。

野瀬 そうですね。

鈴木 何も問題なくやれたってということですね。でも、ところが病棟を移転して遠くなってしまって。

野瀬 そうですね。

鈴木 距離が大きかったってことですか。

野瀬 距離が大きいのと、僕は別に、その、他の人と違って割と息が持つんで。

鈴木 はい。

野瀬 その間ぐらいは大丈夫やと思ったけど、病院が「あかん」って言ったんで。

鈴木 なるほど。息が持つんで、自分、あ、その5分とか時間あっても。それまでは、じゃあ、かなり、じゃあ5分以内でもう行けたってことなんですか。それだけもう、近かったんですね。病棟と学校って。

野瀬 一歩入ったら病院やった。

鈴木 あ、じゃあ、もう1分とかそのぐらいで。

野瀬 そうです。

鈴木 なるほどね。えっと、じゃあその後って、その、じゃあ担任の先生、どうしようかってなって、なんか対策取ろうとかにならなかったんですね、その学校の中で。

野瀬 病院が言い出したのが、その移転の 1 週間ぐらい前に「もう学校には行けません」みたいなことを言って。移転するのはもちろん 1 年前とかから知ってたんですけど、まあ、移転しても、当然、学校には行けるんやろうとは思ってたから。言うて 5 分の距離やから。で、1 週間前になってから「学校には行けません」みたいなことを言いだして、先生も聞かされてなかったみたいで。

鈴木 それは、どうして病院はそんなに直前になって言うことになったんですか。

野瀬 反感買うの分かってたんじゃないですか。

鈴木 ん？

野瀬 反感、反感を買うの分かってたんじゃないですか。生徒と先生から。

鈴木 ああ。

野瀬 分からないですけど。

鈴木 なるほどね。つまり、前もって言ってしまうと、反感っていうか……。

野瀬 どうにかしろみたいな……。

鈴木 ああ、言われると。

野瀬 ……ことを言われると思ったからでしょうね。

鈴木 まあ、そういうことを避けるために。

野瀬 あえて直前に言ったのかもしれないですけど。もちろん学校も僕らも抗議はしたんですけど。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 看護師配置はみたいな。

鈴木 ん？

野瀬 学校に看護師を連れてきてもらうとか。

鈴木 ああ、はあはあはあ。

野瀬 みたいな、多分、交渉はお互いにしたと思うんですけど。学校も僕らも。

鈴木 なるほどね。抗議をしたっていうのは、えっと、先生もなんか言ったってことですか。

野瀬 多分、言わはったと思うんですけど。

鈴木 ああ。

野瀬 で、まあ、言った結果、病棟内に学習スペースっていうスペースを作ってくれた。ただ、まあ、もちろんそんなんですぐ生徒たちが納得いくわけがなく。

鈴木 ああ。生徒さんたちも、なんか声、なんか野瀬さん自身もなんか言ったりとかしたんですか。

野瀬 僕は「学校に行きたい」とは言ったんですけど。

鈴木 それはどなたに言ったんですか。

野瀬 主治医の先生。

鈴木 あ、主治医の先生に。そのとき主治医の先生は何ておっしゃってましたか。

野瀬 「吸引とかがあるから、君は学校まで行くことはできない」みたいな感じで。

鈴木 主治医の先生、そのときはお一人。

野瀬 そのときは、いや、そのとき、もう2人。

鈴木 お二人。初めからお二人なんでしたっけ、野瀬さんって。

野瀬 中学2年、3年ぐらいのときに……。

鈴木 あ、なるほど。

野瀬 ……研修医で入ってきた女の先生が僕のことを診ることになって、そのまんま研修医が終わって宇多野に就職して、その後、主治医として。まあ、元から僕を診てた主治医と一緒に主治医をすることになって。

鈴木 へえ。そういうことって珍しいんですか。

野瀬 多分、珍しい。

鈴木 2人ってあんまり聞かないですよ。どうしてその人は主治医になったかって、お聞きになりましたか。

野瀬 いや、聞いてはないですけど、多分、研修医のときから診てたからやと思うんですけど。

鈴木 ああ。で、えっと、抗議をしたときの、じゃあ、主治医の先生っていうのは、前からずっとかかってた。

野瀬 そうです。

鈴木 ああ。その研修医の人にも言ったんですか。

野瀬 まあ、そのときにはもうドクターになってはったんで。

鈴木 ええ。

野瀬 一応、伝えたのは伝えたんですけど。

鈴木 お二人とも。

野瀬 その先生は来たばっかりっていうか。

鈴木 ああ、そっか。

野瀬 身分が低いから。

鈴木 なるほど。

野瀬 前からいる先生の言うことを聞くしかない状態ではあったと思うんですけど。

鈴木 ということは、違う意見もあったかもしれない。

野瀬 かもしれないですね。

鈴木 あ、かもしれない。なるほどね。じゃあ、えっと、野瀬さんとしてはその主治医の先生に伝えて、えっと、先生がたも院長とかに言ったんですかね。

野瀬 は、分かんないですけど。

鈴木 分かんないけど、どなたかに言ったってこと。

野瀬 多分。

鈴木 ああ。交渉っていうか、話し合いをしたっていうことですか。

野瀬 いや、僕自体そういう場はなかったです。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 「家族が来たときやったら行ってもいいよ」みたいなことは言わはって。

鈴木 家族？

野瀬 家族。

鈴木 いてもいい。

野瀬 行ってもいいよって、学校に。

鈴木 え、ごめんなさい、どういうことですか。家族が……。

野瀬 家族が来たら医療的ケアができるんで、家族が。

鈴木 なるほど。

野瀬 まあ、家族の責任の下でやるんやったらいいよみたいな。

鈴木 なるほどね。あの、一応、じゃあ、そういうふうに声を伝えたのって、病院側としてはスペース、病院内のスペース作ってくれたりとか、「家族が来たらいいよ」みたいなことを言ったってということですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 逆にもし、そういう抗議をしなかったらどうだったんですかね。

野瀬 うーん、まあ、僕、高校やったんで、中退するしかなかったんじゃないですか。

鈴木 ああ。

野瀬 パソコンも、パソコンはあったから。まあ、ただ、今みたいにそんな Zoom とかが発達はもちろんしてなかったから。

鈴木 はいはい。なるほど。ということは、抗議とかしてなかったら、学習の機会すら提供してくれなかったかなど。あ、そういうふうに思うんですね。それだけ病院側としては、じゃあもう、あの、学校には行けないの一点張りだったってということですか。

野瀬 多分。

鈴木 へえ、すごいな。

野瀬 ただ、まあ、医療的ケアがなかった子は普通に学校には行ってたんで。

鈴木 ああ。他の、ごめんなさい、他の子たちっていうか、その、野瀬さん以外にも医療的ケアが必要な人っていらっしやったわけですよね。

野瀬 後輩に1人いて。

鈴木 その子はどうなりました？

野瀬 その子もずっとそのスペースで。

鈴木 ああ、スペースでね。

野瀬 その子、当時は小学生やったんで、これからいろんな経験していくっていうときにそれやったから、だいぶかわいそうではあるけど。

鈴木 ああ、なるほど。うーん。実際、ご家族いらっしやったときに、学校に行って授業を受けることってありましたか、その後。

野瀬 うち、親も平日もちろん仕事なんで、1回だけ懇談会の日に部活、部活だけ1回行ったぐらいで。

鈴木 5月？

野瀬 部活動に。

鈴木 あ、部活動。

野瀬 何月やったかは覚えてないけど。

鈴木 あ、懇談の日に部活動があつて、そのときにご家族も一緒に。

野瀬 そう。親に早めに来てもらつて。

鈴木 なるほどね。ああ、そっか。なんか、あれなんですね。やっぱり病院側としては、あっさりとそういうことを言うてしまうんですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 うーん。その学習っていうか、勉強することっていうのはやっぱり権利だと思うんですけど、なんか、それをなんかあつてなく、それは無理だみたいな感じで。

野瀬 そうですね。機会を奪われてしまつて。

鈴木 うーん。でも、やっぱ申し訳なさそうにはされてましたか。病院側としては。

野瀬 いや、もうなんか当たり前かのように言つてました。なかなか多分、先生も僕らもイラッときてて。

鈴木 ああ。

野瀬 もう、向こうのスタンスとしては、入院してるんやから、こっちのあれを聞くんは当然でしょうみたいな感じで。

鈴木 ああ。なんかそういう印象みたいなのを持つてことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 それは話し方とかにですか。

野瀬 出てる感じが。

鈴木 ふーん。あの、なんかその、何ていうんですかね、その、生徒会か何か物が言うとか、そういうことはないんですね。

野瀬 まあ、病院やったから。

鈴木 ああ。でも、一応、生徒会はあるんですか、学校の中に。

野瀬 あるのはあるんですけど、まあ、ほぼ知的と発達の子らがやってるから、まあ、言

うたらあれやけど、ほぼ形だけというか。

鈴木 なるほど、そうなんだ。え、それはどうして、ごめんなさい、人数的にやっぱ向こうのほうが多いからってということも関係してるんですか。

野瀬 多分。

鈴木 ふーん。え、昔からそうなんですか。あ、昔からって、野瀬さんが入られた頃から。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん、そうなんだ。じゃあ、身体の人が関わることはなかったんですか。自治会、あ、自治会というか生徒会に。

野瀬 なかったかな。

鈴木 へえー、そうなんだ。

野瀬 ほんまに学校っていうのはこういうこともやるんだよっていうのを、教える場にすぎなかったですね。

鈴木 なるほど、なるほど。あの、その生徒会の役員とかを選ぶとき、選挙とかされないんですか。

野瀬 選挙はしたんですけど。

鈴木 ああ。でも、基本的にいつも知的とか発達とかの。

野瀬 そうです。

鈴木 役員全員ですか。

野瀬 ほぼ。まあ、僕も出てたりはしたんですけど。

鈴木 あ、やったことあるんですか。

野瀬 一応。

鈴木 それはどういう役職だったんですか。

野瀬 なんか途中から役職はなくなって。

鈴木 うん。

野瀬 昔は会長、副会長とかあったんですけど、今は全員、生徒会役員っていう名前になって。

鈴木 え、いつ、ごめんなさい、え、それは途中からですか。

野瀬 途中から。途中から、いや、まあ任期が終わって、次の年とかから。

鈴木 へえ。

野瀬 上下関係をなくすみたいなの。

鈴木 へえ。それは誰が決めたんですか、そういうふうに。

野瀬 いや、多分、学校の先生かな。

鈴木 え、それは野瀬さん的にはどう思います？ そういうふうになるってということについては。

野瀬 なくすのはいいけど、もっと生徒がこれを実現したいってなことを、先生は手伝ったほうがいいんじゃないかなと思った。普通なんか生徒会やったら、こういうことを実現しますとか、それに向かってみんな動き出すと思うんですけど、全然動いてはなかったから。

鈴木 なるほどね。やっぱ役職っていうのはあったほうがいいと思いますか。

野瀬 そうですね。

鈴木 そっか。じゃあ、病院側に生徒が何か物を言うための手段っていうのが。

野瀬 ほぼなかったですね。

鈴木 ほぼない。じゃあ、先生たちは何か組合とかで何か言うってこともないんですか。

野瀬 どうなんやろ。

鈴木 個人の担任の先生が、じゃあ個人的に言うしかない。

野瀬 恐らく。

鈴木 ああ。

野瀬 というか、まあ、その学科の一番偉い先生。普通科やったら普通科の1番目の先生。

鈴木 なるほど、なるほど。ふーん。じゃあ、そういう話し合いの場に、もちろん生徒さんが参加することもない。

野瀬 ない。

鈴木 ああ、そっか。ご家族の人はどうだったんですか。そのときなんか言えないんですか、病院に対して。

野瀬 「なるべく学校に行かしたってくれ」とは、多分、お父さんが言ってたと思うんですけど。

鈴木 あ、そうですか。それは、あの、個人的にっていうことですか。

野瀬 恐らく。

鈴木 ふーん。家族の皆さんっていうのは、例えば、あの、PTA とかそういうのはあるんですか。

野瀬 PTA は多分あったのはあったと思うんですけど、普通科の親はほぼ入ってなかったから。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 平日とか仕事が忙しくて。

鈴木 なるほど。じゃあ、PTA 自体も、そういった身体の人を代表する人がいない状況で。

野瀬 ほぼいないですね。

鈴木 じゃあ、そこがなんか動きをしたっていうこともなかった、そのときに。あ、そうですか。じゃあもう、病院側に対して本当に組織的に言える所がないような状況。

野瀬 そうです。

鈴木 はあ。

野瀬 でも学校から言っても、じゃあ、看護師雇ってくださいみたいな感じやから。

鈴木 え。

野瀬 看護師を雇ってくださいって、学校で。

鈴木 あ、なるほどね。学校で、学校側が看護師を雇ったら、それでいいんじゃないかと。ふーん。で、そのとき学校サイドとしてはどういうふうに言ってたんですか。その看護師を学校でっていう。

野瀬 いや、僕も一応それを聞いたことはあるんですけど、教育委員会からの返答で、病院が近くにあるから看護師は要らないでしょうみたいな。

鈴木 えー、ひどいですね。じゃあもう、両方から拒否されてるような状態ですか。

野瀬 ですね。

鈴木 じゃあ、教育委員会に一応、学校の・・・。

野瀬 も、言わはったと思う。

鈴木 言わはって。看護師を付けてほしいと。だけど、それも病院が近くにあるからって断られて。

野瀬 多分。まあ、近くにはあるんやけどと思いながら。

鈴木 ふーん、本当、たらい回しですね、もう。

野瀬 多分、先生も大変やったと思うんですけど。

鈴木 うーん。じゃあもう、どっち付かずになってしまって、もう……。

野瀬 そうですね。

鈴木 せめて病院の中で学習スペースをっていうことになったっていいことですか。はあ、それは大変でしたね。なるほどね。じゃあ、その後って、病院の中で火は使えないということは、理科とか。

野瀬 まあ、先生がばれんようにやってたりはしましたけど。

鈴木 ハハハ。

野瀬 ガスバーナー持ってきて。ただ、見つかったらすごい言われると思うけど。

鈴木 すごいですね、その担任の先生は。じゃあ、やっぱりすごくその、野瀬さんの担任の、その女性の先生は、すごくもう皆さん、生徒さんのことを考えていらっしやっただけですね。

野瀬 まあ、ただ、高校のときからは男の先生みたいな。中学からはずっと男の担任に変わって。

鈴木 中学は変わって。あ、そっか、中学は変わったのか。

野瀬 高校のときなんで、それは。病院で授業してたのは。

鈴木 うん。

野瀬 でも、その先生も「あんまりや」って言ってたから、こっそりガスバーナー持ってきたりはしてはったけど。

鈴木 へえ、高校の先生ですか。高校のときって、あの、教科によって先生が違うんですか。

野瀬 そうですね。中学から。

鈴木 あ、中学からね。

野瀬 先生も大変やったと思うねん。

鈴木 うん。じゃあ、こっそりとガスバーナーを。ハハハハ。

野瀬 音でばれそうやけど。

鈴木 うん、そうですか。

野瀬 でも、言うて高校やから、単位を取らなあかんから、ちゃんと実験もしなあかんし、先生も頭を悩ませてはいたんだと思うけど。1人で理科室で実験はって、それをビデオに撮って持ってきたりもしてはったけど。

鈴木 ふーん。じゃあ、何とかいい教育をつていうことで考えていらっしやった。

野瀬 そうですね。

鈴木 じゃあ、中、高って結構、もう、比較的いい先生に当たってるっていうことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん、なるほどね。で、他の数学だとか英語だとか、そういうことも病院の中で行う。

野瀬 そうです。

鈴木 ふーん。でも、その教科の先生って、その、鳴滝のほうでも授業やんなきゃいけないわけですよ。英語・・・。

野瀬 そう。だからもう、授業終わったら、もう走って病院まで行って、僕らが行ってたら多分、別には走らんでもよかったと思うんですけど。教室が隣にあったりするから。

鈴木 なるほど。じゃあ、急いで来てくれて。

野瀬 そうですね。

鈴木 じゃあ、二重にやるような感じになるんですかね。

野瀬 多分。

鈴木 なるほどね。パソコンはそのときって病棟の中で使ってたような感じですか。

野瀬 そうですね。学校が病院にお願いして、特別にネットの線を引かしてもらって。

鈴木 あ、そうですか。えっと、ネットの線を引かせてもらったっていうのはいつ頃ですか。

野瀬 新しい病棟ができてすぐぐらいに多分、病院にお願いしはって。学校用のサーバーとかがあるんで、その線はせめて引かしてほしいみたいなのは、お願いを多分しはったと思うんですけど。

鈴木 あ、なるほど。それはじゃあ、病棟が新しくできてからなんですね。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、えっと、ネットの線っていうのは、その、病棟の中のどこに引いたんですか。

どこっていうか、まあ、全部使えるようにしたっていうことですか。

野瀬 いや、そのスペースだけ。

鈴木 あ、そのスペースで。あの、えっと、学習スペース。

野瀬 そうです。

鈴木 その学習スペースってというのは、普段どういうふうに使われてるお部屋だったんですか。

野瀬 もともとは車いす置き場にする予定やったんで。だからエアコンもなんもないんで、夏場くそ暑いんですけど。

鈴木 ハハハハ。え、ずっとエアコンなかったんですか。

野瀬 エアコンはないです。

鈴木 えー。

野瀬 ちっちゃい扇風機が2台あるだけ。

鈴木 うわー、大変ですね。

野瀬 「エアコン付けてくれ」って学校の先生が言わはったんですけど、「病棟の壁に穴を開けたくない」とか言わはって、それで付けてもらえずに。

鈴木 あ、付けてもらえなかった。え、穴が開けれないっていうことですか。

野瀬 壁に穴を開けたくないらしいんで。

鈴木 えー、ひどいな、それは。どういうことなんだろう。えー、そうですか。じゃあ、せめて、じゃあ、ネットの線を引かせてくれっていうことで。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。え、それまでの旧病棟では、ネットの線って、じゃあ入ってなかったってことですか。

野瀬 ネットの線は、まあ、患者さんが使うやつは Wi-Fi が飛んでたりはしたんですけど。

鈴木 あ、そうですか。患者さんが使う Wi-Fi というのは、自分のやつですか。

野瀬 自分用、そうですね。確かそれも20歳以上じゃないと使わしてくれへんとかがあったから。で、なんか入会費が1万何ぼとか取られるから。

鈴木 え、ごめんなさい、えっと、何、何。え、入会費って。

野瀬 なんかパソコンクラブっていうのに入ったら、20歳以上は使える。Wi-Fiが。

鈴木 あ、20 歳以上になったらパソコンクラブというものがあって、そこに入れることになる。

野瀬 そうそう。

鈴木 1 万円というのは、えっと、入会費。

野瀬 入会金です。その Wi-Fi 代とか、多分。

鈴木 あ、じゃあ一回、でも取りあえず 1 万払ったら、一応、使えるようになる。はあ。で、それは、えっと、Wi-Fi を使うことができるっていう意味ですよ。

野瀬 そうです。

鈴木 じゃあ、どこへ行っても、一応、20 歳以上だったら、そのクラブに入ったら病棟の中で使える。

野瀬 いや、パソコンにその専用のアダプターを付けないと使えないんで。だから、スマホとかはもう自分の通信料だけでやるしか。

鈴木 ああ、なるほど。あ、そうなんですか。Wi-Fi なのに。

野瀬 なんか専用のアダプター付けるとできるようになってて。

鈴木 へえ。じゃあ、そのアダプターを付けられるのは、えっと、ノートのパソコン。

野瀬 まあ、ノートかデスクトップ。

鈴木 ノートかデスクトップ。ノートかデスクトップのパソコンっていうのは、患者さん、持ってらっしゃる。

野瀬 ほぼ。

鈴木 自分で。じゃあ、自分用のパソコンにそのアダプターを付けることはできる。

野瀬 そうそう。

鈴木 ふーん、なるほどね。そっか。20 歳以上、なるほどね。で、えっと、うーんと、じゃあ、えっと、ごめんなさい、その旧病棟の中でパソコンを使うとしたら、その自立訓練のその時間帯ぐらいってということですか。病棟の中で。

野瀬 いや、多分、自立活動の間はネットなしで。

鈴木 あ、そっか。

野瀬 パソコンを打つだけという。パソコンの中の機能だけで完結するんで。

鈴木 なるほど。そうなんですか。あ、そうか、ネットを使えてるわけじゃないんだ。

野瀬 そうそうそう。パソコンは使えるけど。

鈴木 そうなんだ。え、それは、ごめんなさい、鳴滝の、えっと、小学校のときもそうだったんですか。ネットは使ってない。

野瀬 病棟では使ってない。

鈴木 あ、病棟。学校の中はどうでした？

野瀬 では使ってた。

鈴木 使ってた。インターネットを。へえ。学校ではネットを使えて、病院の中に、病棟に入ると使えなくなる。

野瀬 そうです。学校は多分、Wi-Fi を飛ばしてるわけではないから。

鈴木 なるほど。

野瀬 学校が Wi-Fi 飛ばしてたら、多分、そこから電波は取れるんですけど。

鈴木 なるほどね。あ、ごめんなさい、じゃあ学校は Wi-Fi を飛ばしてるんですか。

野瀬 Wi-Fi は飛ばしてない。LAN ケーブルです。

鈴木 あ、じゃあ LAN ケーブルでやって。なるほどね。じゃあ、病棟の中には LAN ケーブルもないんですね。

野瀬 は、ない。

鈴木 患者さんが使えるものはない。

野瀬 そうです。

鈴木 へえ、大変だな。じゃあ 20 歳にならないと、その、インターネットが使え、まあ、使えないっていうか、その、Wi-Fi は使えない状況っていうことですね。でも、その、携帯は使える。携帯は、その・・・。

野瀬 は、一応。

鈴木 通信でって。それは何歳からでも使えた。

野瀬 僕は中学から携帯は持ってたので。勝手にポケット Wi-Fi とかを持ち込むのはあかんみたいで。

鈴木 それは駄目。あ、駄目なんですか。

野瀬 駄目みたい。医療機器に影響を及ぼすとか。

鈴木 ああ。

野瀬 結構、時代遅れではあるけど。

鈴木 うーん、大変ですね。

野瀬 京大病院とかでも Wi-Fi、お金さえ払えば使えるようにしてくれてるはずやから。それも別にやってないから。

鈴木 その、お金、そうやって普通の Wi-Fi の環境。

野瀬 そうです。を、提供してくれてる。宇多野はそれはないから。

鈴木 20 歳以上ってことで。

野瀬 携帯には使えへんし。

鈴木 あ、そっか。それは携帯には使えないもんね。そっか、なるほどね。じゃあ Wi-Fi ではなくて、携帯の通信でやる、やるしかインターネットはできない。

野瀬 そうですね。

鈴木 何歳からとか、それはありました？ 小学校は駄目とか。小学生のときは病棟の中で。

野瀬 いや、特に聞いたことない。

鈴木 あ、聞いたことない。じゃあ使ってる人も、お子さんはいらっしやったってことですか。後輩とかでも。

野瀬 小学生はあんまいなかった。

鈴木 あ、いなかった。中学ぐらいになったら、じゃあ使うわって。

野瀬 持ちだすから。

鈴木 持ちだして。じゃあ、それでとやかに言われることはないってことなんですね、それについては。

野瀬 どうか。なんか言われてたような記憶が・・・。

鈴木 あ、言われてた。

野瀬 「勝手に携帯なんかして」みたいな。

鈴木 あ、言われました？ え、それ、誰に言われるんですか。

野瀬 病棟のナースとかから。

鈴木 ナース。

野瀬 取りあえず「医療機器に影響が」みたいなことを、なんかあれば言わはるから。

鈴木 ああ、そうなんだ。

野瀬 まあ、ただ最近の医療機器、そんな影響ないことは僕らも知ってるんで。

鈴木 ハハハハ。なるほどね。じゃあ、野瀬さんが中学時代に携帯持って、なんか通信やったときに、そういう小言を聞くことがあった。

野瀬 たまに。

鈴木 あ、そうですか。でも禁止はしない。

野瀬 携帯は禁止はしてなかった。「Wi-Fiは禁止」って言ってはったけど。

鈴木 うーん、なるほどね。

野瀬 ただ、Wi-Fiなんて今頃、今の時代、どこにでも飛んでるから。

鈴木 ハハハハ。

野瀬 禁止されたところでっていう感じはあったけど。

鈴木 ですよ。なるほどね。ふーん。そういうことについて、やっぱり野瀬さん以外の患者さんたちも、みんな、やっぱりそれは違うんじゃないかとかって思っていました？

野瀬 いや、あんま言ってる人はいなかった。

鈴木 あ、言ってない。使ってる人がそんないなかったってことですか。

野瀬 まあ、みんなほぼパソコンを使ってはるから、「別に携帯は使えんでいいやん」っていう人が多かった。

鈴木 なるほど。あの、ちょっと学校、じゃあ、もう一回戻るんですけど、あの、学校の中で授業を受けて、ご飯を食べるときって、いったん病棟、戻ってきました？

野瀬 そうですね。

鈴木 で、食べて、また戻るっていう感じですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、戻ったときって、あの、看護師さんが介助とかしてくれるっていうことですか。

野瀬 いや、(****キンプロ@01:40:42)の話でたまに出てきたと思うんですけど、指導室の方が食事介助を。

鈴木 療育指導室でしたっけ。

野瀬 そうそう。保育士さんとか指導員がご飯食べさせたりは。

鈴木 じゃあ、大体、給食っていうか……。

野瀬 病院食を。

鈴木 ……病院食を食べて戻る。で、知的とか発達で在宅の……。

野瀬 人は、多分、お弁当を持って。

鈴木 弁当。大藪さんもお弁当みたいな。

野瀬 そうですね。

鈴木 じゃあ、その食事の時間は、じゃあ、別々で食べてるような状況ですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 なるほどね。学校の中じゃ食べれないんですね、なんか、そういう病院の食事を持ってきて一緒に食べるとかはできない。

野瀬 は、できないんです。

鈴木 ああ。それは別に、特になんか思いませんでした？ それはしょうがないかなっていう感じですか。

野瀬 うん、まあ、小学校のときからやってたから、多分、慣れてしまってた。

鈴木 なるほどね。

野瀬 一緒に食べたいなどは思ってたけど。イベントごとのときとかは、その、調理実習してとかのときは、学校でみんなで食べたりはしたけど。

鈴木 あ、そうか。そのとき、あ、そうですね。そのとき、じゃあ介助は。

野瀬 学校の先生が。

鈴木 学校の先生。なるほどね。なんか学校って、なんか給食の時間って、友達同士とやっぱり食べて。

野瀬 そうですね。

鈴木 それができないっていうのは、結構やっぱりつらいですよ。うーん。あの、なんか普通校にいる人たちと交流とかってありました？ そのとき、なんか。他の学校の、普通学校の。

野瀬 小、中では一応、交流会があつて。

鈴木 はい。

野瀬 年に2、3回は行ったり来たり、行ったり来てもらったりはしてた。

鈴木 あ、そうですか。どこの小、中と交流だったんですか。

野瀬 小学校のときは宇多野小学校と。宇多野小の発表会、見に行ったり、こっちの、なんか、卓球バレーを体験しに来てもらったりとか。

鈴木 ああ。

野瀬 中学も同じような感じ。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 中学校は双ヶ丘中学校の部活を見学させてもらったり。

鈴木 はいはいはい。

野瀬 逆にこっちの部活を見学してもらったり。

鈴木 なるほど、なるほど。それはどう、どう思いました？ 交流会は。

野瀬 自分たちを知ってもらうのにはいい機会だなと思ったんですけど。なかなか多分、一般の子らは障害者のことをあんま知らんから。

鈴木 まあ、じゃあ、嫌な感じはなかった。

野瀬 そうですね。

鈴木 行事は基本的に運動会だとかあるんですよ。鳴滝の小学校。

野瀬 そうです。運動会と文化祭と。

鈴木 文化祭。

野瀬 おっきいのはその二つかな。あとは卓球バレー大会を年に3回やるかな。

鈴木 卓球バレーが。それは学内でやるんですか、大会は。

野瀬 支援学校全体と。6月のは京都、京都府内、そのいろんな施設全部かな。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 学校とか関係なしに。

鈴木 支援学校全体っていうのは、京都の支援学校。

野瀬 京都の。

鈴木 あ、その大会をやるんですか。へえ。え、どちらでやるんですか。

野瀬 京都府立体育館と高野障害者スポーツセンター。6月は大抵、府立体育館で。

鈴木 なるほど。

野瀬 冬、12月はスポーツセンターかな。

鈴木 なるほどね。じゃあ、そこでいろんな人たちと会うチャンスが。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ。へえ、なるほどね。運動会はあれですよ。鳴滝の学校の中だけですよ。

野瀬 そうです。

鈴木 ですよ。で、文化祭もそうですよね。

野瀬 そうです。

鈴木 どんなことをされるんですか、運動会だったら。

野瀬 全部、知的も発達も入ってくるんで。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 ま、普段はその学科が二つ交わることがないんで、合同で相談して、何ができるか。あっちの子らが僕らに何が手伝えるかとかを考えながら、まあ、それこそ卓球バレーをやったり、玉入れを僕らができるように考えて。

鈴木 なるほど。

野瀬 それを向こうが補助をしたり。

鈴木 へえ。あ、じゃあ、そういうことを考える場っていうのがあったってことですか。

野瀬 まあ、一応、委員会の時間が。

鈴木 あ、委員会が。それは野瀬さんも参加されて。

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。文化祭っていうのは。

野瀬 文化祭は、主に発表会。

鈴木 発表会。

野瀬 まあ、劇したり。

鈴木 あ、劇ね。はあはあはあはあ。あ、そっか、これはあれですよ。小、中、高、全部でやるんですよ。

野瀬 そうです。

鈴木 ですよ。ふんふんふん。じゃあ、親なんかもみんな来て。

野瀬 そうですね。

鈴木 はあ。病院の関係者って来ることあります？ こういう行事って。

野瀬 指導室の方が見に来てくれたりはするけど。

鈴木 あ、そうですか。

野瀬 看護師さんはあんま来ない。

鈴木 ハハハハ。

野瀬 たまに、ほんまに仲良かったりしたら来てくれはるときはあるけど。

鈴木 あ、そうですか。指導室の方っていうのは保育士さんとか。

野瀬 そうですね。

鈴木 なんかやっぱり指導室の人のほうが、なんか、関係がやっぱりあれですか、親密なんですか。患者さんからすると。

野瀬 あれは保育士っていうのがあるから、子ども好きっていうのもあると思うんですけど。

鈴木 ああ、なるほどね。ふーん。あの一、なんか、先ほどなんか部活動があったっていうふうにおっしゃってたんですけど、なんか部活、入られてたんですか。

野瀬 部活は結構、毎年選べるんで。

鈴木 はい。それは中学から。

野瀬 いや、小学校から。

鈴木 へえ。

野瀬 それこそ知的と発達の子らと合同なんです。

鈴木 へえ。

野瀬 小学校のとき入ったのが、前半がパソコンクラブに入ってた。

鈴木 はい。

野瀬 後半は音楽部に入ってた。

鈴木 音楽部。

野瀬 で、その後、制作部っていう所に入ってた。

鈴木 はい。制作部。

野瀬 ええ。美術の延長みたいな。

鈴木 ああ。

野瀬 で、ボードゲーム部に入ってた。

鈴木 はい。

野瀬 で、音楽部に戻ってた。

鈴木 はい。

野瀬 で、高校になって体育部に入ろうと思ったけど、病棟が移転した関係で泣く泣くボードゲーム部に。

鈴木 え、ごめんなさい。中学は音楽。

野瀬 中学は音楽、いや、制作部と音楽部。

鈴木 あ、制作部と音楽部。小学校がパソコンクラブ。

野瀬 と、音楽と。

鈴木 あ、音楽部と。

野瀬 後半は音楽。

鈴木 ふんふん。体育部っていうのは、高校のとき何をされようとしたんですか。体育部。

野瀬 卓球バレーを・・・。

鈴木 あ、卓球バレー。

野瀬 ……主にやっている所なんで。

鈴木 でも、そのときに病棟が移転になって、どうなったんですか。

野瀬 泣く泣くボードゲーム部と制作部に入ったのかな、確か。高1が制作で、高2が、高2、3がボードゲーム。

鈴木 何？

野瀬 ボードゲーム。

鈴木 ボードゲーム。ボードゲームって、あのボードゲーム。

野瀬 そうです。

鈴木 へえ。

野瀬 人生ゲームとかオセロとか。

鈴木 ああ、はいはいはい。へえ。でも、あの、野瀬さんとしては体育部で卓球バレーやりたかった。

野瀬 そうですね。

鈴木 じゃあ、それは結構ショックでした？

野瀬 そうですね。

鈴木 ふーん。それは病棟側はノーって言ってたんですか。部活動は。

野瀬 いつも学校に行くのに関しては「あかん」って言ってはったんで。

鈴木 でも、あれですよ。制作部とボードゲーム部って。

野瀬 は、テレビ会議システムが教育委員会にあったんで。

鈴木 なるほど。

野瀬 それをうまく使いながら。画面見ながら、「Aの何番、ひっくり返してください」って言いながら。

鈴木 ああ、そっか。

野瀬 制作は、まあ、学習スペースでも1人で作ろうと思ったら作れるから。

鈴木 なるほど。卓球バレーは、じゃあ、体育館でやらなきゃいけないからってということですか。

野瀬 そうですね。6対6集めなあかんから、さすがに病院には集められへんし。

鈴木 6対6って相手。相手ですか。

野瀬 そうです。

鈴木 あと、卓球台が必要だし。

野瀬 そうですね。

鈴木 学習スペースだとね、無理ですもんね、卓球台。

野瀬 学習スペースはめちゃめちゃ狭いんで。

鈴木 あ、そうなんだ。ハハハ。

野瀬 お隣のキッチンぐらいしか。

鈴木 アハハハハ。それじゃあ無理ですね。そっか。ふーん。でも、この部活動って、別にそんなに時間がかかるわけではないのに、吸引の問題でノーってということですか。

野瀬 恐らく授業の一環みたいな感じなんで、1コマ40分なんですけど。

鈴木 なるほど。それだけ認めるっていうわけにはいかないってということなんですか。

野瀬 多分。

鈴木 うーん。でも、たんの吸引って、そんな1時間で、そんなたんの吸引してなるっていうわけでもないですよ。

野瀬 まあ、体調と場合によると思う。

鈴木 ああ、場合による。じゃあ、野瀬さんとしてはどうすればそれはよかったと思いますか、本来ならば。高1のときに学校に行くためには。

野瀬 移転せずに同じ場所にもう一回造ったら、学校が真横にあったわけやし。

鈴木 なるほどね。

野瀬 それが無理なら、看護師を学校に配置するとか。

鈴木 なるほど。でも、なんであれなんですかね。移転、建物をそんなに離れた場所に造ってしまったんですかね。それはもうしょうがないんですかね。病棟はもうくつついてて、新しく建てるってなると離れた所に造んなきゃいけないっていう、そういうことですかね。

野瀬 恐らくそういうこと。

鈴木 ふーん。で、結局、古い建物ってどうなっちゃったんですか。壊したんですか。

野瀬 壊して、駐車場になった。

鈴木 あ、駐車場になってる。ふーん。で、あの一、小学校時代に、その、大藪さんところ、出会うじゃないですか。それって小、えっと、野瀬さんが小3のときですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 やっぱり大藪さんと出会ったことっておっきいですよね。

野瀬 そうですね。いや、割と仲良くなったのが最近というか。

鈴木 あ、そうなんですか。

野瀬 付き合いは長いんですけど、まあ、中学からクラスが違ったので。

鈴木 あ、そっか。つまり、じゃあ、最近っていうのは高校とかそういうことですか。

野瀬 高校卒業、2人ともして、すぐぐらいに。

鈴木 ふーん。

野瀬 彼と彼の先輩がボランティアサークルをやってて、入院中に、当時は重訪が使えなかったんで。で、まあ、重訪を使えないから、もちろん僕たち、外出するのに手伝いが必要からボランティアを募って、その人たちに手伝ってもらって外出支援とか。彼は高校のときからボランティアを集めて、テスト勉強の支援とかをしてもらってたんですけど。高校卒業してから、そのグループに入って、そこから大藪君ともまた関わりだすようになって、仲良くなった感じです。

鈴木 なるほどね、ふーん。顔を出すようになってっていうのは、入院してる野瀬さんの所についてということですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ。その外出の、じゃあ、支援を受けるようになったっていうのは、高卒のときぐらいですか。

野瀬 高校卒業してすぐに。

鈴木 ふーん。ということは19・・・。

野瀬 9、8かな。

鈴木 8とか9。今から、じゃあ6・・・。

野瀬 6、7年前から。

鈴木 6、7年前。2015とか。

野瀬 そうそう。

鈴木 なりほどね。じゃあ、このボランティアサークルっていうのは、その、大藪さんが地域でやってるあれなんですか。学校の中でやってることなんですか。

野瀬 学校で立ち上げて、もともと帰宅支援とか。大藪君は(#####@01:57:23)親が送り迎えをしてたけど、大藪君は、まあ、彼から聞いたら分かると思うんですけど、大学が天理大学なんで。

鈴木 ん？

野瀬 天理大学。

鈴木 あ、天理大学、はいはい。

野瀬 なんで、まあ、天理大学では1人暮らししてて、もちろんそこから、まあ、そこではヘルパーを使ってはったんですけど、校内ではヘルパー利用が認められてないんで、まあ、そこでボランティアを使い、学生ボランティアとかを集めるので、その練習のためというかも恐らくあると思う。

鈴木 なるほど。じゃあ、えっと、高卒する前の段階で、もう大藪さんはボランティアサークルを始めてて。

野瀬 そう。

鈴木 なるほどね、そういうことか。

野瀬 そのメンバーがそのまま外出支援とかしてもらおう。

鈴木 なるほど、そっかそっか。で、大藪さんのほうが卒業は早いんですよ。

野瀬 そうですね。2個上なんで。

鈴木 ですもんね。なるほどね。で、えっと、野瀬さんがもう卒業するぐらいのときっていうのは、もう大藪さんは天理大学の2年生とかになってて。

野瀬 そうですね。

鈴木 ボランティアサークルもやってて。

野瀬 そうですね。

鈴木 で、えっと、そのボランティアサークルを利用し始めたときぐらいから、大藪さんと結構、関わるようになった。野瀬さんは。

野瀬 まあ、前からちょいちょい連絡は取り合ってたんですけど。

鈴木 ああ。ふーん、なるほどね。で、なんかあの、座談会で野瀬さん、あの、何だっけ、「泌尿器関係のトラブルが卒業後に多くて」っていうふうには話してるんですけど、これ、えっと、で、それで市立病院に結構行くようになった。

野瀬 そうです、そうです。宇多野に泌尿器の先生がおらんくて。

鈴木 なるほどね。

野瀬 外部から週一遍、違う、週 2 回来てはったりはしたんですけど。ただ、その曜日でしか来てはらへんから。

鈴木 なるほど。

野瀬 緊急でなんか起きても宇多野では診れんくて。

鈴木 なるほど。ふんふんふんふん。で、そのときに、なんか 1 人暮らしをしている方が共通のお友達で、その人の家を見たんですか。

野瀬 そのときに、まあ、それこそ、そのボランティアサークルの人らと一緒に外出して、その子の部屋に遊びに行ったときに、1 人暮らしって面白そうやなと思って。

鈴木 それって何歳のときだったんですか、野瀬さんが。

野瀬 それは 19 かな。

鈴木 19。じゃあ、もうボランティアサークル、使い始めてすぐ。

野瀬 すぐぐらいに。

鈴木 ああ。で、その友達っていうのは、えっと、鳴滝の生徒さん。

野瀬 の先輩。

鈴木 先輩ですか。

野瀬 友達ですけど。

鈴木 へえ。

野瀬 大藪君と僕の共通の友達(#####@02:00:53)。

鈴木 ああ、なるほど。じゃあ、それはもう鳴滝にいたときから知ってる方。

野瀬 そうです。

鈴木 なるほど。

野瀬 ちょうど大藪君の 1 個上かな。

鈴木 ああ、1 個上。じゃあ、一緒に勉強されてたこともあるんですか。

野瀬 小学校は同じクラスでした。

鈴木 なるほどね。

野瀬 その子は筋ジスの子で。

鈴木 筋ジス。

野瀬 終日、呼吸器付けてて。気管切開はしてないですけど。

鈴木 あ、そうですか。呼吸器は付けてた。

野瀬 ええ。

鈴木 そのときが初めてですか。1人で暮らしてる人を見たのは。

野瀬 1人で暮らしてるって聞いてたのはずっと聞いてたんですけど、まあ、見たのはそのときがほぼ初めて。

鈴木 初めて。ちなみにその方は、なんか重訪とかを受けて生活されてたんですか。

野瀬 22から重訪で。

鈴木 あ、そうですか。今でもそうですか。

野瀬 今でもそうです。

鈴木 JCが関わってる方。

野瀬 今月からJCが入るようになった。

鈴木 ふーん、なるほど。今でもお付き合いはあるんですか、野瀬さんと。

野瀬 まあ、あります。

鈴木 ああ。そのとき、あの、ご覧になって、いいなって思ったってということなんですよね。

野瀬 そうですね。

鈴木 自分にもできるかもしれないって思った。

野瀬 まあ、結構(#####@02:02:37)、まあ、もちろん病院とは違って自由な生活をしてはったから。好きなときに好きなもん食べたり、出掛けたいときに掛けたりして。

鈴木 なるほどね。で、その、あの、先輩の方もかなり楽しそうにやってた。

野瀬 そうですね。

鈴木 うーん。野瀬さんに対しても、やったらみたいなことを言われました？

野瀬 「やるんやったら応援するよ」みたいな。「手助けはするよ」って言ってくれはって。

鈴木 そのとき大藪さんも1人で暮らしててたっけ。まだでしたっけ。

野瀬 19のときは奈良で1人で暮らしてはる。

鈴木 あ、じゃあ、そのときも大藪君、さんも1人で暮らしてて。

野瀬 そうですね。

鈴木 なんか、その先輩の所に行くっていう、なんか流れっていうのは、やっぱり行ってみようみたいな感じになったっていうことですか。

野瀬 そのサークルの活動で、たまに遊びに行ってみようかみたいな。

鈴木 ふーん、なるほどね。じゃあ、今から考えると、そのときの、その先輩の生活を見たっていうのは、やっぱりご自身が退院するきっかけになったことで大きかったですか。

野瀬 あとは、市立病院に行ったのが大きかったですけど。宇多野と対応が、ナースの対応が全然違うので。

鈴木 えー。

野瀬 呼んだらすぐ来てくれるし。

鈴木 あ、そうですか。え、ごめんなさい、この市立病院に行ったり来たりしてるっていうことと、このボランティアサークルとの関係、どう、どうつながってるんですか。

野瀬 いや、まあ、たまたまつながってた。たまたま僕の体調が悪かったんで、行ったり来たりしてたんですけど。まあ、それで看護師の対応が市立病院のほうが全然よかったっていうのと、ま、友達が1人暮らしをしてるのを見て、まあ、じゃあ、退院したほうが楽しいんじゃないかって思うようになって。

鈴木 ああ。そのお友達は、その市立病院に通ってたんですか。

野瀬 通ってはないですけど、行ってはいるみたいですけど。

鈴木 あ、行ってはいる。でも、その宇多野と市立病院を行ったり来たりするときって、ボランティアサークルを使ってたっていうことですか。

野瀬 僕は使ってないです。救急車で運ばれてたんで。

鈴木 じゃあ、そのときは、じゃあお母さんが。

野瀬 と、お父さんが。

鈴木 お父さん行って、で、その同じときぐらいにボランティアサークルも使い始めてって、そういうことですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 なるほどね。そっかそっか。市立病院こんなに違うのかっていうふうに思ったって
いうことは、じゃあ、宇多野病院、離れてもいいんじゃないかって思ったってことなんで
すか。

野瀬 そうです。

鈴木 ふーん。そこの市立病院に入院するっていうわけではなく。

野瀬 宇多野に入院してたのが、入所ちゅう形で入院してたんで。市立病院にはその制
度がないんで。

鈴木 なるほど。

野瀬 宇多野に戻るしか。多分、入院はできるんですけど、3 カ月たったらどのみち帰ら
なあかんから。

鈴木 なるほど。つまり、在宅で1人で暮らしながら、市立病院にも行ってみたいな、そ
んなイメージができたってということですか。

野瀬 そうですね。

鈴木 ああ、なるほどね。そういうことか、うん。分かりました、大体。えっと、あの、
大体、あの、高校卒業するときって、みんな進路って考えると思うんですけど、野瀬さん
は何か考えられました？ なんかそのときって。相談したとか。

野瀬 入院中ってというのがあって、なかなか就労支援とかいうサービスは二重には使えな
いって国から言われて、で、当時はデザイナーになりたいっていう希望があったんで。

鈴木 何になりたい。あ、デザイナー。

野瀬 デザイナー。で、まあ、高校のときの先生と相談して、高3で印刷関係の就労支援
をされてる事業所に行って、で、まあ、そこで2、3回作業さしてもらって。

鈴木 へえ。

野瀬 「でも、絶対デザインとかはやったほうがいいよ」っていうのは言って、向こうの
人から。でも、まあ、こうこうこうでみたいな。「入院してるんで、ここのサービスは使
えなくて」って。「じゃあ、卒業したら、うちと個人契約を結んで、仕事が来たら委託す
るからお願いできるかな」って言われて。

鈴木 へえ。

野瀬 で、高校卒業してすぐ、そこと個人契約結んで、委託業務をいつまでかな。去年の
7月までやらしてもらって。

鈴木 へえ。

野瀬 去年の、一昨年に僕、退院したんですけど、そのときは、一昨年9月か10月ぐら
いから、その系列がやってる就労支援の所を利用しだして。

鈴木 へえ。あ、そうですか。

野瀬 二重契約みたいな。そこの大本の事業所と個人契約結びながら。

鈴木 なるほど。

野瀬 系列の所と就労支援の契約結んで。ただ、それも重訪が、そのサービスっていうんは利用できないんで、JCILのご厚意でJCILの負担で出してもらって。

鈴木 なるほど。介護っていうか重訪を。

野瀬 そうです。去年の7月まで行かしてもらって。

鈴木 へえ。それはA型事業所とかですか。B型とか。

野瀬 就労支援Bです。

鈴木 Bですか。去年の7月まで個人契約。

野瀬 と、まあ、就労支援と。

鈴木 就労支援と。でも、去年の7月で、一応、終わったっていうことですか。

野瀬 いや、僕が、僕の考えが変わったというか。

鈴木 あ、考えが変わった。

野瀬 その、コロナの関係で。

鈴木 なるほど。

野瀬 仕事場に行かんなくなったのと。

鈴木 はいはいはい、なるほど。

野瀬 あとは、まあ、僕が直接お客さんとやりとりするのが好きやったんで。

鈴木 なるほどね。

野瀬 で、まあ、あとはJCに恩があるんで、JCに移って、直接の地域移行とかに関わったほうが。

鈴木 なるほど。

野瀬 直接タイマンでしゃべれるかなと思って。

鈴木 なるほど、なるほど、なるほど。

野瀬 で、まあ、9月からJCに移籍して。

鈴木 なるほど、なるほど。去年の9月からですね。

野瀬 そうです。

鈴木 そうかそうか。じゃあ、イラストレーターの仕事っていうのも、一応、JCの中でやる。

野瀬 たまに。

鈴木 たまにやるっていうことですね。なるほどね。分かりました。あの、他の方って、やっぱりあれですか。あれですかっていうか、その、えっと、高校卒業して、病院を退院しないでそこにいるっていう人が多いんですか。

野瀬 多分ほとんどの人が。

鈴木 ほとんどの人が。なるほどね。

野瀬 宇多野に30年いますとかいう人も多い。

鈴木 そうですね、ふんふんふん、なるほど。学校内でなんかいじめだとか体罰ってありましたか。

野瀬 いや、特に。

鈴木 特に嫌なことは。他の人たちも。

野瀬 なかったです。

鈴木 なかった、分かりました。えっと、はい、あの、2時間ちょっとだったの。

野瀬 あ、ええ。

鈴木 はい。また時間を改めて。

野瀬 あ、はい。

鈴木 はい。ちょっとお疲れだと思うんで。

野瀬 はい。

鈴木 また改めて来てお伺いしたいと思います。なんかちょっと、あの、今度は病院の生活と、それからちょっと地域移行のこととか、そういうこともちょっと引き続きお聞きしたいと思いますので。すみません、お疲れ。ありがとうございました。

野瀬 はい、ありがとうございました。

鈴木 はい。

(丁)